

權利財産ヲ保護スル能ハザルヲ及現政府ノ弊事ノ極メテ多キモ之ヲ矯正スル能ハズ而シテ全躰ノ改革ヲ行フニ先タチ取敢ヘズ許多ノ弊事ヲ矯正スルコノ二項ヲ決議シ更ニ進ミテ其ノ所謂取敢ヘズ矯正ス可キノ弊事ヲ議決セシガ其項目ハ王ハ直チニ現内閣ヲ退ケ人民カ指名スル人士中ヨリ一人ヲ撰ビテ新内閣ヲ組織セシムルヲ現總理大臣兼外務卿ギブソン氏ヲ放逐シテ政府ニ任用セザルヲ王ガ詐僞掠奪セル阿片專賣免許料七萬一千弗ヲ本人ニ送附スルヲ王ハ一切議員撰舉ニ干渉セザルヲ王ニシテ之ヲ許諾セズンバ一層ノ大集會ヲ開キテ之ニ對スルノ覺悟ヲナス可シ等ナリシガ國王ハ其勢力ノ敵シ難キニ恐レケン前述決議ノ本ダ決了セサルニ早クモ其内閣ヲ退ケ指名中ノ一人ヲ舉ゲテ内閣組織ノ任ヲ委子タリシヨハ人

民ハ未ダ満足セザルヲ以テ國王ハ各國領事ヲ延キ其鎮定處分ヲ乞

ヒタリシガ孰レモ之ヲ辭退シ唯此機ニ乘シ政府ヲ一洗シ憲法ヲ改定シ人望ニ沿フニ在リト忠告セリ而テ此事變ノ重ナル原因ハ國王カヲカワ陛下ヲ始メ各官衙ニ賄賂ノ醜行甚レキヨリセル者ナリト布哇政府ノ其新内閣員ハ左ノ如シ。

内閣總理大臣
兼大藏大臣
ダブリユー、エル、グリーン。

外務大臣
ゴッドレー、ブラウソ。

内務大臣
エル、エー、サー、ストン。

陸軍 大將
シー、ダブリユー、アス、フ、オールド。

未ダ幾何モ無ク人民ノ總代人等ハ新憲法ヲ起草シ七月五日ヲ以テ國王カラカワ殿下ニ提出シ其ノ捺印ヲ促シタルニ國王ハ憲法各條ノ是非ヲ熟考セントテ僅カニ四十八時間ノ猶豫ヲ得タレドモ當時極メテ混雜ノ際ニテ未ダ一讀下サヘ終ラザルニ早クモ既ニ猶豫ノ

期限過キタルヲ以テ、再ビ暫時ノ猶豫ヲ申出デムレドモ、總代人等ハ斷然拒絕シテ王ノ乞ヲ容レズ。王ハ終ニ已ムヲ得ズシテ新憲法ニ捺印シ、新内閣宰相グリーンン氏ニ渡サレタルガ、司法大臣ハ直チニ王ヲシテ此ノ憲法ヲ遵守スベキ旨ノ宣誓ヲ爲サシメ、尋テ内閣員一同モ宣誓ヲ行ヘリト云フ。此ノ憲法ニ據レバ、立法權ハ王ト國會トニ在レドモ、王ノ否認シタルコトモ議員三分ノ二以上ノ一致ヲ得レバ直チニ行フコトヲ得ルモノニシテ、國王ハ實ニ一定ノ俸給ヲ受クル所ノ一貴族ニ止マリ、政務ニ參與スル特權アル位ニ過キザルガ如シ。布哇國人民ノ自由權力ハ眞ニ偉大ナリト謂フベシ。

然レモ騷擾以來人氣未ダ穩カナラズ、或ヒハ再ビ困難ニ陥ルベキヤノ恐レアリトイヘリ。何ニトナレバ目下同國ニ於テ保守主義ヲ執ル人々ハ皆ナ新内閣ヲ目シテ、現政府ハ彼ノ密約ト隱謀ノ手段ヲ用ヒ、

且ツ武器ヲ以テ迫リタル改革黨ノ撰ブ處ナレバ、ソノ根據固カラズ決シテ信ヲ置クニ足ラザル者トセリ。又國民ノ甚ダ不満足ヲ感ズルコトハ他ナシ。是レ國會ノ代議士ヲ撰ムニ當リ、ソノ撰舉人タリ被撰舉人タル者ノ財産ノ上ニ嚴シキ制限ヲ立テ、ソノ實際ニ就テ見レバ殆んど禁止シタルガ如キ有様アリ。或ヒハ在留外國人ガ未ダ布哇政府中ニモ公ケニ頒布サレザル事件ヲ探知シ、各々コレヲ本國政府ニ通報スルガ如キ不都合ノ處爲アルモ、布哇政府ハ更ニソノ舉ヲ答メザル事等コレナリ。茲ニマタ國民ノ中ニテ國王ニ抵抗スルノ一黨アリ。毎ニ曰クカラコリ王ハ國ノ憲法ヲ廢棄スベキ權力ヲ有セザル者ナリ。何トナレバ國王ノ主權ハ憲法ニ因テ生ズル者ナレバ、其憲法ヲ廢棄シ或ハ改正スル等ノ事ハ全ク國王ガ權力ノ部内ニハ屬セザル者ナリ。然レバ國王ガ近來ノ行爲ヲ評スレバ、コレヲ限モナキ無法ノ行

爲ナリト云ハザルヲ得ズ、王ハ當時ツノ顧問ニ列リタル奸臣等ノ手ニ試セラレノ事ヲ懼レ、止ヲ得ズシテ彼輩ガ意見ニ曲從シタリト云フノ外ニハ出ザルベシト。是ニ於テカ王ノ行爲ヲ橫議スル者アルニ及ベリ。加之布哇國ガ目下財政上ノ大危険ト云フハ、曾テ前首相ギブソン氏ガ募集シタル二百萬弗ノ公債ナルガ、今ヤ新内閣ハ右公債證書ヲ處分スベキ保證ヲ爲サマレバ、終ニ棄絶サルベキヤノ危険ヲ生ジタリ已ニ現首相グリン氏ニハ右前政府ノ公債證書ハ今ニ於テハ早ヤ價直ナキ者ナリトノ旨ヲ確言シタリト。斯ナル時ハ右證書ノ持主ニ最モ莫大ノ損失ヲ被フル者ハ多ク英國人ナリト云フ。

明治廿二年七月卅日、午前三時ウカルコックスナル者土人ノ有志數百ヲ率ヒ、王宮ヲ襲ヒ、八時政廳ヲ陷レ、政府軍ト接戦シ、米國軍艦ハ政府ノ爲メニ有志派ヲ攻メタルヨリ、遂ニ降參シタリ。此變亂ハ布哇政府

ガ白哲人種ヨリ組織サレ、我儘勝手ナル處置アルニ起因セリト。或人曰ク、將來日本ト布哇ノ間ニ貿易通商ヲ旺盛ナラシメントセバ、宜シク米國ノ故例ニ倣ヒテ交互條約ヲ調訂シ、日本ノ雜貨品ハ無稅ニテ布哇ニ入り、布哇ノ砂糖ハ無稅ニテ日本ニ入ラシムベシト。是レ實ニ某氏ノ獎說スル處ニシテ、予輩ガ現ニ布哇ニテ傳聞シタル處ナリ。偕此議論ノ是非ハ予輩ノ與リ知ラザル處ナリト雖モ、若シ夫レコレヲ實行セント欲セバ、宜ク布哇糖類ガ我國ニ到來シテ臺灣、呂宋、東印度諸島、香港等ノ糖類ト競争シ得ル乎ヲ綴カニ檢覈セザル可カラズ。而シテ予輩ガ更ニ檢覈セントスルモノハ、我國大島、琉球地方ノ糖業トノ關係是レナリ。

布哇糖類ガ無稅ニテ我國ニ輸入シ、臺灣、呂宋、東印度諸島、香港等ノ糖類ト競争シコレヲ壓倒スルモ可ナリ。然レ予輩ノ獨リ憂慮ニ勝ヘザル者ハ、布哇糖類ガ又我大島、琉球、薩摩、四國地方ノ糖業ヲ壓倒センコト是レ

ナリ。固ヨリ廉價ナル砂糖ヲ輸入シテ、我國人ガ一人モ多ク砂糖ヲ仕用スルノ便宜ト快樂トヲ得セシメンコトハ予輩ガ深ク希望スル處ナレド、是レガ爲メニ我國ニテ漸次發達進暢セントスル製糖事業ニ幾多ノ障害ヲ附與セシコトヲ是レ恐ルハナリ。人或ハコレヲ聞キ輒チ謂ハントス、大島琉球薩摩四國地方ノ製糖事業ハ如何ニ旺盛ナレバトテ、コレガ爲メニ衣食スル人民ハ僅ニ二三拾萬ニ過ギザルベシ、此ノ二三拾萬ノ人民ガ快樂ト便宜ト、是レヲ三千八百餘萬人ガ廉價ナル砂糖ヲ仕用シ得ル處ノ快樂ト便宜トニ比較セバ、其輕重果シテ孰レカト、予輩固ヨリ強ヒテ保護貿易說ヲ唱道スルモノニ非ラズト雖モ、唯今日ノ狀況ニテハ、我國内ニテ漸次發達進暢セントスル民間ノ事業ハ成ル可クハ、其儘ニ發達セシメンコトヲ希望スルモノナリ。予輩布哇糖類ト日本糖類ト價格ノ比較如何ニ到リテハコレヲ精細ニ熟知セズト雖モ、一片ノ痴心コレ

ヲ厭々スルニ忍ビズ。是レ斯ク曉々スル所因ナリ、今更ニ大島糖業ニ關シ左ノ諸報告ヲ拔萃シテ世人ガ參考ニ供セントス。

鹿兒島縣下大島の糖業者は一昨十八年來の不測にて次第に困迫に陥りたるより、昨十九年中同業の回復を圖らんとして政府へ十萬圓の貸下けを願出で既に聞届けられたるに依り、今回同地糖業者中に於て規約を設け、今後輸出する砂糖は大坂商船會社と特約を結び、専ら同會社の流船を以て大島の名瀬港より積出すことに爲さんとて、本年(明治二十年)大坂商船會社の流船朝日丸は去月二十一日(二十年三月)沖繩を出帆し、同所より黒砂糖四樽、鹿兒島縣下大島より同品千百樽を搭載して同二十八日夜大坂へ歸着せしが、右の内沖繩より積み來りたる分は本年の初荷にて、大島よりは二番荷なるが、例年沖繩より産出する砂糖は凡十四五萬樽に下らず、大島及び其屬島より産出する高は七萬樽位の由なるが、昨年は夏より秋の交に掛けて兩地とも風災又は旱損の爲め大に不作を來し、殆んど半作の有様なれば、砂糖を以て生活を立る人民は大に困難の域に陥り、就中沖繩の如きは砂糖を以て租税を上納する處なれば、第一頁糖第二勸業糖第三賣糖と唱へ凡十四五萬樽製糖する内右頁糖凡二萬樽勸業糖凡二萬樽は是非上納せざるを得ず、勸業糖なる物は勸業課より肥料其他の

費用を借受たる方へ償却の爲め上納する物にて、賣糖は農民の所得にして勝手に賣拂ふと得る者なるが、昨年の如き不作に際しては右第一第二の砂糖を引去る時は凡十四五萬樽の内僅に三萬樽位の賣糖を餘すのみなれば、本年は二種の上納糖丈の製造は済みたるも賣糖は未だ新荷を積出す場合に至らずして僅に四樽丈見本として積來りしものなりと、又之に反して大島の納税は總て金納なるを以て砂糖は出來次第に積み送るの例なるが故に、此度二番荷の大坂に到着するに至れり、最も本年一月十三日同會社へ依頼したる品もあれ共、昨十九年は風害の爲め甘蔗は頗る不作にて近年になき少額の取入れなれば、隨て本年の輸出は昨十九年に比して凡二万千八百丁餘の減少ならんとの豫定なれば、大坂地方にても輸入の減したるが爲めに假も次第に小壘を運びに至り、目下百六十目一斤に付大島上四錢七厘、中四錢五厘、下四錢二厘位の取引直段なるが、昨十九年中産地より長崎及び大坂に積出したる總高を聞くと、徳の島より二万七千丁、嘉真郡より三万三千丁、此の二島は大島の眞島なり、池利より四千丁、イヨモより四千丁、赤木名より四千丁、東古見より二千七百丁、注用より三千丁にて合計六万七千五百丁なりと、又今廿年に積出べき豫算額は、徳の島より一万八千丁、嘉真郡より一万八千丁、池利より二千丁、イヨ

モより三千丁、赤木名より二千丁、東古見より千七百丁、注用より二千丁にして合計四万五千七百丁の豫算なりと、大坂商船會社の朝日丸は去る十三日二十年四月、沖繩を出帆なし、昨夜大坂に歸港したるが、同船は沖繩産の黒砂糖五十挺、大嶋産砂糖二千挺を積み來りたり、沖繩は目下砂糖製造の最中なるが、大島は最早製造済となりたる由なり。

草の屋の賤かたはこと百敷の大宮人につけまほしけれ。

●第拾八章。布哇在留日本移住民。

同憲ノ友人福島武治氏曩キニ布哇政府ノ招聘ニ應ジ日本移住人民ノ監督官ヲ以テ布哇群島中ノカリイ島レフエ村ニ在リ筑波艦ノホノル、港ニ寄着スルヤ予ニ書ヲ寄セテ久瀾ノ情ヲ述べ、且曰クホノル、近傍ニハ日本移住民ノ在ルモノ無シ、足下若シ此輩ガ現況ヲ觀察セント欲セバ、宜クカリイ島ニ來ル可シ、請フ東道ノ主人タラント、予乃ハチ

十九年九月十四日午後五時ヲ以テカワイ島行ノ汽船「イワラナイ」號ニ搭ス船客中ニ一日耳曼人アリ。カワイ島某製糖所ノ持主ニシテ日本ノ移住民ヲ使備スルモノナリト予乃ハチコレニ日本移住民ノ批評ヲ諮問シタルニ、概チ曰ク「日本役夫ハ或ル部分ニ酷ダ宜クシテ、或ル部分ニ酷ダ宜シカラズト。蓋シ適切ノ批評ニシテ能ク穿チタル格言ナリト云フ可シ。下等船客中ニ一日本人アリ、其郷管ヲ問フニ東京ノ産ニシテ、今春此國ニ移住シ、現職ハ料理人ナリト答ヘタリ。

カワイ島滞在中、山口縣ノ移住民中ニテ竊盜云々ニ關シ二人相鬪爭シ爲メニ一人ハ鐵槌ヲ以テ其額上ヲ打撃サレ、竟ニコレヲ福島氏ニ訴ヘタルノ訟ヲ聽キタルヲアリ。且這般移住民ニ關シ見聞スル處甚タ妙シトセズト雖、要スルニ其完全ナルモノハ布哇總領事安藤太郎氏ガ外務大臣(當時ノ外務大臣井上伯)ニ具狀シタル報告書ニ過グルモノナシ

今其報告書中ヨリ左ノ記事ヲ拔萃ス。

各耕地我が勞働者就業上ノ優劣如何、本官ノ巡見セシ勞働者ハ山口、廣島、福岡、熊本ノ四縣民ニシテ、其ノ内職業ヲ勉勵シテ屋主ノ満足ヲ得タル者ハ山口、廣島二縣ヲ以テ第一トス。而シテ其ノ間優劣ナキニ似タリト雖モ、潔癖アリテ節儉ナルハ山口縣民或ハ廣島縣民ニ一歩ヲ讓ルガ如シ、其所謂潔癖トハ家屋ノ灑掃、衣服ノ洗濯善ク行届キタルヲ云フ。怠惰ノ徒ハ勞働後横臥雜談、又ハ博奕、飲酒ニ耽リテ其ノ自用ヲ辨スル能ハサル一般ノ弊風ナルガ故ニ、潔癖ハ其ノ勤勉ノ一端ヲ見ルニ足ルヘキモノトス。然レモ博奕ハ其ノ毒一般ニ蔓延シテ各耕地之ナキハ殆ト稀ナリ、唯其ノ耽溺ノ淺深ニ由リテ妨害ノ自他ニ及ボスト然ラサルトアルノミ。又熊本福岡ノ者ニ至リテハ一般ノ比較上其勉強節儉固ヨリ山口、廣島二縣ノ下ニ出ツト雖モ、概シテ純粹ノ農夫ナルガ故ニ博奕ノ一事ヲ除クハ平生就業上ニ於テ屋主ヨリ苦情ヲ蒙ルコト先ヅ稀少ナリト謂フヘシ。耕地博奕ノ甚シキニ至リテハ彼等連宵不眠身體疲勞スルヲ以テ尋常ノ動作ニモ堪ユル能ハズ、遂ニ疾病ニ陷ル者往々之アリ。且此ノ輩其ノ博友ヲザル者ヲ散見シ、善チ他人ニ加フル少ナラズトス。然レモ近來ハ其ノ巨魁ヲ嚴罰シ或ハ踏國セシメタルヨリ、風俗多少改良ニ赴キタルヲ覺ヘタリ。惜又

移住民中今日猶意情放縱ヲ以テ嫌惡セズル者ハ千葉東京神奈川ノ如キ都會ニ接近セル地方ノ縣民ナリ此等ハ悉ク第一回渡船人ニ屬シテ人選最も疎漏ナル分此ノ間ニハ新聞記者ト自稱スルアリ演說家アリ劍客ノ落魄者アリ兵士アリテ就業以來成使ノ苦情絶ル期ナク而シテ其ノ訴狀ノ文章字體共ニ看ルニ足ルベキ者往々之アリ此ノ輩ニシテ當耕地ノ對邊働作ヲ甘ニスベキ職ナキニヨリ其ノ苦情決シテ無理ナラズト信ス故ニ移住民タル者ハ僻村ノ純農ニシテ白米ハ一歳中視日晷時ノ外食セザル如キ輩ニ限ルヘシ此ノ如キ農夫ナルハ其ノ當耕地ノ勞働ヲ以テ決シテ難事トハ看做サザルナリ本官巡回ノ際第一回ノ渡船ノ一農夫ニ就キ其ノ職業ノ難易ヲ質問セシニ答テ曰ク耕地ノ働作ハ概シテ日本ヨリ容易ナリ今其ノ一二ニ證據ヲ掲ゲンニ第一肥料ヲ用弗ズ各耕地共甘蔗ノ培養ハ多ク海水ノ一法ニ由ル第二肩背ヲ勞セズ耕地ハ運搬到處牛馬ヲ使用ス第三日曜日ノ休業アリ第四夜業ナキ等是ナリ然レ用職業ヲ勤去スルト勞働定時間内休息スル能ハザルノ二事ハ當初不慎ノ輩ニ於テ言ヘカラスルノ困難ヲ覺ユルナリ蔗葉奉ノ如ク兩邊銳利ニシテ之ヲ勤去スル時指掌ヲ刺傷スル甚シキヲ以テ凡一月餘ハ兩手腫痛シテ用ニ堪ヘザルヲ常トス又故郷ニ在リテ勞働ノ定時ナク隨意ニ田間ニ息休シ喫烟或ハ

難談セシ風習ヲ直チニ一變セザルハ其苦辛又手痛ヨリモ甚シキ者アリ云々ト藤葉刺却ノ一事ハ暫ク置キ我役夫ノ定時間内同斷ナク働作スルニ苦ムノ一點ハ本官其ノ語ノ至極者實ナルニ感嘆セリ又一方ニ向ヒテ二三ノ縣民雜居スル一耕地ニ於テ其ノ狀況ヲ觀ルニ働作上甲縣ハ乙縣ト觀ヒ二回ノ新來ハ一回ノ先進ト等ヒ以テ雇主ノ満足ヲ博セントスルアリ此等ハ決シテ他邦人ニ未嘗見ノ異質ナリト雇主等モ贊稱セリ殊ニ彼等支那人ト一耕地ニ働作スルハ翌日ノ疲勞ヲモ顧ミズ非常ノ勉力ヲ奮フニヨリ或ル耕地ノ如キハ單ニ多數ノ支那人獎勵ノ爲ニ日本人ヲ僱使スルアルニ至レリ布哇公使曰ク吾進ノ異質ヲ有シ耕等ニ機敏ナル日本人ニシテ加フルニ連續勞働ノ習慣ヲ以テモハ世界無比ノ農夫タルベキニ惜哉ト此ノ語頗ル過稱ニ似タリト雖モ又其實ナキニ非ザル可シ布哇群島中甘蔗耕作ノ地方ハ總計八拾五ヶ所其ノ内我カ移住民ノ就業スル場所ハ四拾八箇所ニシテ其人員二千八百六拾人即チ廣島山口熊本福岡ノ四縣ヲ多數トシテ滋賀岡山和歌山東京神奈川千葉等ノ諸縣民ナリト又本官赴任後各耕地移住民一般ノ狀況ヲ通察スルニ苦情今猶存シテ雇者被雇者ノ間兎角ニ協和セザルモノアルハ第一回ノ渡船人ニシテ即チ前條ニ記載スル如キ執業ニ非ザルノ輩ナリ其ノ他第二回第三回

ノ渡航者ニ至リテハ、一般ニ善ク其業ニ從事シ目下先ツ事情平穩ナリト謂フ可シ抑モ當初労働者ノ苦情起因スル所ヲ概言センニ其ノ間于委萬狀ノ情實アリト雖モ要スルニ第一ハ我カ人民海外ノ生活ニ暗ク次ニ風土ニ慣レズ又專業ニ熱セザル等ヨリ當初ノ事々物々艱難ナラザルハナク殊ニ首飾ニ通曉セザレハ主僕ノ間情意隨ヒテ壅塞シ雇主ハ妄ニ不順怠惰ト唱へ被雇者ハ一概ニ殘虐無法ト訴フルニ至レリ又各耕地ノ地主若クハ支配人ナル者見ルニ其ノ労働者ヲ使役スルニ寛アリ猛アリ巧アリ拙アリ又其ノ地ニ氣候ノ溫和ナルアリ嚴烈ナルアリ便ナルアリ不便ナルアリ而シテ第一回渡航人ノ内遊惰ニシテ虛弱ノ徒不幸ニモ猛ニシテ拙ナル雇主ニ就キ氣候嚴烈ニシテ不便ナル地方ニ分送セラレタルモノ少カラス是又苦情ノ一大原因タリシト篤信セリ耕地ノ所有主ニシテ巨大ノ金額ヲ費シ雇入タル労働者ノ事ナレバ其ノ辨價ニ十分ナル使役ヲ爲スハ當然ノ理ニシテ又彼等其輩ニ對シテ慈愛恭敬ノ意ヲ表ス可キ情義モナクレバ保護法律ノ如何ニヨリテハ中間使苛遇ノ形迹ヲ顯ハス者アルモ決シテ怪ムニ足ラサルヘシ然ルニ今日ニ至リテハ我カ移民漸ク風土ニ慣レ專業ニ熱シ言語モ淺許カ通曉セシヨリ隨ヒテ主僕ノ間逐次ニ調和加フルニ新條約締結以來ハ我カ通辨醫師ノ各地ニ分遣セ

ラ以シテ以テ彼等ノ便宜廣大ナル又昔日ノ比ニ非ズトス蓋シ各耕地ニ労働スル移民各種入申今日我カ人民如ク保護ノ周到ナルハ當地ニ於テ未曾有ト云エモ敢テ過言ニハ非サル可シ
 隨意渡航入月給人二割五分ノ貯金 明治十八年四月以降十九年三月迄貯金トシテ布哇國大蔵省へ預入ノ總額ハ洋銀二萬五千二百二十一弗六十仙ニシテ此ノ利率四百二十九弗トズ但シ利率一箇年五分ノ割合ナリ
 著者云ク此預金額ハ近ク布哇政府ノ國庫ヨリ拂戻ヲ請求シ我外務官吏中ニテ之ヲ管理スルトナリタリト云フ
 隨意渡航人眞縣名區別ハ左ノ如シ

- 一 第一回渡航人 (明治十八年一月) 總數九百四十五人 (男女小兒共)
- 内 山口縣 二百廿二人 廣島縣 四百二十人
- 神奈川縣 三十七人 岡山縣 二百十四人
- 和歌山縣 十三人 三重縣 二十二八人
- 靜岡縣 五人 滋賀縣 十一人

宮城縣 一人

一第二回渡航人 (明治十八年六月) 總數九百八十九人 (男女小兒共)

内 渡航人

三百九十九人 廣島縣 二百七十六人 熊本縣

百四十九人 福岡縣 十二人 神奈川縣

三十七人 新潟縣 八人 千葉縣

七十四人 滋賀縣 十人 群馬縣

三十三人 和歌山縣

一第三回渡航人 (明治十九年二月) 總數九百二十六人 (男女小兒共)

内 渡航人 四百九十九人 山口縣 三百五十八人 廣島縣

三十六人 熊本縣 四十九人 神奈川縣 同寄留人

著者云、去十八年五月以來、我政府下布陸政府ノ保護ニ由リ、三年ノ約定ヲ以テ我邦ヨリ移住群島ニ渡航セシメ、前後三回ニテ其總人員二千八百

五十九名ナリシガ、其内歸朝、解約死亡等ニテ數百人ヲ減シ、現今群島各耕田ニ在テ約定ニ從ヒ勞動スル者男一千八百八十九名、女三百五十三名、小兒九十六名、合計二千三百三十八名アリ、今此人員ヲ諸縣下貫屬ニ由テ類別スレハ、廣島縣民八百五十二名、山口縣民八百二十五名、熊本縣民百八十七名、○福岡縣民百三十名、○神奈川千葉群馬諸縣民百〇一名、○京府東民七十四名、○滋賀縣民五十六名、○和歌山縣民三十七名、○新潟縣民三十五名、○岡山縣民三十三名

右ノ後四五回移住民ハ、布哇ニ渡航シ、現今其數五千ヲ超ス。

以テ日本移住民現狀ノ如何ヲ知ル可シ。然レバ今日ノ情況ニテハ、雇者ト被雇者トハ、漸ク相調和スルハ、傾向アリテ、深ク予輩ガ思慮ヲ煩ハスニ足ラザル者ニ似タリ。予輩ノ日本ニ在ルヤ、各新聞紙ヲ閱讀シテ、日本ハ移住民ガ布哇ニ在リテ、虐使苛遇到ラザル無キヲ知リ、心私ニ憤悶ニ禁ヘズ、一度布哇ニ到リテコレヲ檢覈センコトヲ思意セリ。而ルニ何シテ圖ラシ身親シク布哇ニ至リテ、各移住民地ノ現況ヲ見聞スレバ、一

二トナク、悉ク豫想ノ外ニ出デ、轉々人ヲシテ、一見百聞ニ若カズ、感ア
 ラシメ、タリ、蓋シ這般ノ誤開虛報ハ移住民中ノ書生演説者等ノ手ニ出
 デタルモノニシテ、此輩身軀頓弱、資性懶惰、文筆口舌ニ巧ニシテ、勞働使役
 ニ堪ヘズ、時ニ或ハ監督者ノ呵責ヲ被フリ、心私カニ不平ニ禁ヘズ、竟ニ
 這般ノ造語ヲ以テ本邦ニ知告シタルモノナランカ、固ヨリ這般ト雖モ
 時ニ或ハ悉ク造語ニ非ラズ、マテ間々正確ノ報告アルナラント雖モ、要
 スルニ此輩ガ自己ノ不平ヲ訴ヘタルヤ、テナレバ、予輩ハ敢テ之ニ信ヲ
 措カザルナリ、然レバ人アリ、若シ布哇ニ移住民ヲ遣出スルノ利害ヲ諮
 フ者アレバ、予輩ハ左ノ數件ヲ以テ其利益アルヲ獎説セシトス。

(第一) 日本人民下等社會ガ其職業ニ就クヲ得ル事。

日本ニテハ人口多クシテ、事業尠ク、隨テ下等社會ガ其職業ヲ得ルニ
 困ムコトアリ、然レバ此輩ガ布哇ノ如キ、勞力ノ賃銀高貴ナル箇處ニ移

住シテ、其ノ衣食住ノ欠乏ヲ補充シ、漸ク其得利ヲ儲蓄シテ、新事業ヲ
 興起スルニ到レバ、日本國ノ爲メニハ直接間接ノ利益アルモノト云
 フ可シ、且甲去リテ、布哇ニ移住スレバ、乙日本ニ在リテ、コレニ代リ、甲
 ノ事業ヲ承ケ、繼グコトナラン、且甲布哇ニ到リテ、高貴ナル賃銀ヲ得テ、
 漸ク生計上ニ餘綽ヲ生シ、爲メニ本邦ノ物産ヲ取り寄セ、盛シニ之レ
 ヲ注文スルコトナレバ、丙モ亦コレガ爲メニ新タニ職業ヲ得ルコトナラ
 シ、即チ一人ノ移住者ハ三人ノ利益トナル都合ナリ、是レ予輩ガ移住
 者ノ多カラシムコトヲ獎説スル所因ナリ。

因ニ云フ、日本移住民ハ周年一日各拾時間宛、午前六時ヨリ午後四時
 ニ到ル。勞働ス可キモノニシテ、其給料ハ每一人一ヶ月銀貨九弗、別ニ
 食料六弗ヲ支給ス、但シ日曜日并ニ布哇國ノ大祭日ハ休業トス。

(第二) 日本下等社會ニ規律的ノ勞働法ヲ開導スルコト。

勞働法ニ規律無ク時間ノ價值ヲ辨知セザルハ日本農工商社會ノ通弊ナリ。モ一ニ時一まつたら一服煙草をやらざりかトハ是レ日本農夫ノ套語ナリ。西洋勞働ノ法ハ然ラズ、規律ト時間トヲ確定シ庸トメ順序ヲ紊サズ。烟草喫飯ハ各其刻限ヲ定メ時間外ニコレヲ爲スヲ許サズ。然レバ日本ノ移住民ハ當初コレニ慣レズコレニ習ハズ、時ニ或ハコレガ爲メニ幾多ノ苦情ヲ醸シタリト雖モ、近時ハ漸クコレニ熟シコレニ慣レ西洋勞働ノ法ニモ亦通曉スルニ到レリト云フ。語ヲ易テ謂ヘバ、此輩ハ海外ニ到テ西洋勞働法ヲ實地ニ演習シタル者ナリ。然レバ這般ノ西洋勞働法ヲ演習シタル二千ノ役夫ガ三年ノ後漸ク其法ニ慣熟シ本國ニ歸リ日本在來ノ勞役社會ノ間ニ交テ其業ニ就カバ必スヤ這般勞役社會ニ絶大ニノ且有益ナル變動ヲ附與スルカ。且後日我國有爲ノ事業家ガ此輩ヲ使傭スルニ至レバ、自他ノ

第三

日本移住民ガ一昨十八年一月初ハテ布哇ニ到リ各其業務ニ服セシヨリ爾來纒カニ二年ニ過キザルモ本邦ニ送附セシ金額ハ業既ニ拾萬弗ニ上レリ且此輩ガ在布哇日本總領事ノ手ヲ經テ布哇政府ニ附托シタル預入金額モ亦數萬弗ニ到レリ之ヲ要スルニ這般人民ハ日本國內ニテ衣食住ニ窮迫シ復々止ム可カラザルヲ以テ竟ニ布哇ニ移住シタルモノナリ而シテ其利得スル處ヲ儲贏スルヲ業既ニ斯クハ如シ語ヲ易ヘテ謂ヘバ、此輩ハ日本ニテ博取ス可カラザル富貴ヲ布哇ニテ博取シタルモノニシテ即チ日本ノ資本ヲ増殖シタルモノナリ。是レ亦予輩ガ布哇移住者ノ多カラシクハ獎說スル所因ナリ。

(第四) 日本下等人民、冒險進取ノ氣象ヲ涵養シ、兼テ其知識ヲ増殖ス
 一山一水ノ間ニ踴躍シテ其膽略極メテ矮少ニ險ヲ冒カシ危ヲ蹈ム
 才氣慨無キモノハ日本人民ノ短處ナリ。然レバ此ノ短處ヲ矯正スル
 ハ先ヅ海外遠征ノ氣象ヲ涵養スルニアリ。是レ亦予輩ガ布哇ニ移
 住民ヲ遣出スルノ議案ニ賛成スル所因ナリ。
 日本人民ハ又極メテ海外ノ事情ニ暗クコレヲ知悉スルモノ特ニ尠
 シ。然レバ此輩ヲシテ海外ニ移住セシメ、廣ク世界ノ事物ニ通曉セシ
 ム可キハコレ今日ノ急務ナリ。コレ亦予輩ガ布哇移住者ノ多カラシ
 ムヲ獎說スル所因ナリ。
 以上ニ於テ予輩ハ吾國人ガ單ニ布哇ニ移住遷徙センコトヲ獎說セシト
 雖モ予輩ガ常ニ銳意熱心ニ我國人ノ海外移住ヲ獎說スルモノハ獨リ

布哇ノミニ限ルモノニ非ラザルナリ。我同胞ノ海外到ル處ニ移住遷徙
 センコトヲ切望スルモノナリ。願フニ我日本ノ人口ハ歲毎ニ四拾餘萬ヲ
 増殖シ、今ヨリ五十年ヲ經過セバ、趣チ二千餘萬ノ新蒼生ヲ産出スル
 コトナラン。獨リ二千餘萬ノミニ止ラズ、人類ハ猶利息算術ノ重利法ノ
 如クニ増殖スルヲ以テ、或ハ二千五百萬以上ノ大數ニ到ルヤモ知ル可
 カラス。即チコレニ今日在來ノ人口ヲ加フレバ、無慮六千貳百萬ナラン
 トス。是レ五拾年後ノ日本人口ナリ。然ルニ日本國土ノ面積ハ僅カニ貳
 萬五千方里ニ過ギザルベシ。此ノ叢爾タル海島ヤ、豈ニ克ク六千二百萬
 ノ蒼生ヲ衣食セシムルコトヲ得ンヤ。否コレヲ衣食セシムルニ足ル可シ
 ト雖モ、唯勞々役々トシテ朝三暮四ノ生計ヲ是レ營ムニ過ギザルコトナ
 ラン。如何ゾ最大ノ快樂ト幸福トヲ博スルコトヲ得ンヤ。是レ予輩ガ銳意
 熱心ニ我同胞ノ海外移住ヲ獎說スル所因ナリ。加之我同胞ガ海外到ル

處ニ移任散在シテ生業ヲ營ミ農事ニ服シ食足り衣厚ク漸クニシテ
 儲ノ生ズルアレバ其日常仕用スル處ノ物品ヲ本邦ニ注文シコレが供
 給ヲ本邦ニ仰ギ兼テ本邦ト脈絡ヲ通シ身外國ニ在ルモ心内國ニ在ル
 が如キモ人ニ到レバ自他ノ利益スル處蓋シ尠少ニアラザル可シ正ニ
 是レ

Who left the country for country's good.
 "True patriots, we are sure,"

予輩毎ニ英國ノ軍艦ガ煤煙ヲ薰ラシ國旗ヲ海風ニ縹ヘシテ宇内
 處ノ港灣ニ入り來レバ所在ノ英國移住民ハ盛粧炫服シテ或ハ馬ニ跨
 リ車ヲ驅リテ誠實熱心ユコレが好來ヲ迎フルハ狀況ヲ目撃シ心私ニ
 羨痒ニ勝ヘザル處アリ然レモ予輩ハ兼併冒義ヲ懷抱スルモノニ非ラ
 ズ殖民政略ヲ唱道スルモノニ非ラス唯海外到ル處ニ我同胞ノ移住散
 在シテ商業ヲ營ミ農事ニ服セシトテ獎說スルモノナリ海外到ル處ニ

大和民族ガ茫然タル温顔ヲ見ントヲ冀望スルモノナリ海外到ル處ニ
 商業的ノ新日本ヲ拵造セシトテ希願スルモノナリ兼併主義ヲ擴張ス
 ルト商業ヲ保護スルト孰レ殖民政略ヲ主張スルト商業的ノ新日本ヲ
 拵造スルト孰レ新殖民地ニ軍團ヲ配置スルト商館ヲ建設スルト孰レ
 新殖民地ニ武庫ヲ建設スルト商庫ヲ建設スルト孰レイムベリヤリス
 ムト「ゼルプス、ブニルヴァーデニング」ト孰レ「ラテン」民族ノ殖民地ト「サクソ
 ン」民族ノ殖民地ト孰レ「ブラントーシヨント」アロッド、フアイミング」ト
 孰レ南亞米利加ト「濠太利」ト孰レ世ノ壯士ヨ「旅館」ノ二層樓ニ在リテ徒
 ニ空々タル妄想ヲ抱キ「欲吞支那四百州」ノ句ヲ誦ンゼズシテ請フ徐ロ
 ニ圖ル處アレヨ漫ニ空中ニ城樓ヲ築ク「莫」レ漫ニ國姓爺ヲ學ブ「莫
 レ」漫ニ山田長政ヲ學ブ「莫」レ海外到ル處ニ商業的ノ新日本ヲ拵造ス
 ルコト汝ガ今日ノ急務ナレ汝ガ今日ノ急務ナレ

自跋
南洋時事成ル矣。如何ナル文字ヲ以テカ卷末ニ附セン。
南洋トハ何ゾヤ。未ダ世人ガ毫モ注意ヲ措カザル箇處
ナリ。然レバ予輩ハ南洋ナル二字ヲ初メテ諸君ガ面前
ニ拉出シ、是レガ注意ヲ惹起セントスルモノナリ。南洋
ナル新物躰ト新話頭トヲ初メテ捉ヘ來リシ面目ヲ自
得スルモノナリ。良シ自得シタリトテ敢テ望ム處アル
モノニ非ラズ、唯自カヌコレヲ喜ビ、自カラコレヲ樂ミ、
其見聞スル處ヲ心ニ問ヒ心ニ對ヘ、悠々然閑ヤ乎トシ
テ以テ満足スル處アルノミ。予輩固理論家ニ非ズ、實業

家ニ非ズ、然リトテ文字ニモ媚ハザレモ、心許リハ聊カ
多情纏綿ノ小詩人ヲ以テ自カラ任ズルモノナリ。

"A Youth to Fortune and to Fame unknown:
Fair Science frowned not on his humble birth,
And Melancholy marked him for her own."

然レバ若シ夫レ小雨霏々タルノ夜、點滴瀟々トシテ芭
蕉葉上ニ濺キ、四隣人定リテ萬籟寂然タルノ際、會マ客
窓ニ兀坐シテ破机ニ憑リ、影燈ニ背キ、恍惚トシテ自家
ガ腦裡ニ在ル無何有ノ郷ニ彷徨シ、幾般ノ新風色ヲ描
畫スレバ、是レ江州司馬ナラザルモ、轉々青衫ヲ濕ホサ
シムルモノアラン。借問ス其描畫スル處ハ蓋シラレダ

ロ」又賦中ノ風色カ、否イル、ペンセロ「ソ」ノ賦中ニ在
ルヲ如何セン。人或ハコレヲ見テ謂ハントス、子ガ限リ
アルノ學問ト些少ノ識見トヲ以テ、纒カニ二三ノ地方
ヲ歴覽シ、國ニ歸レバ忽チ得々然トシテ漫ニ三閭大夫
夢學ヒ賈生ニ擬シ、何ゾ其言行ノ酷ダ「ヴ非レ」シ、ハム
「ブデレ」ニ似タルヤ、何ゾ其文字ノ醜儻ニシテ且纏綿ナ
ルヤト。嗚呼是レ何ニ言ゾ、予輩曾テ蝦夷ノ山中ニ蟄
居シ、麋鹿ヲ友トシ、狐兔ニ伴ヒ、時ニ或ハ蹴毬調馬以テ
半生ヲ醉夢ニ裡ニ徒費シタルノ間ハ、意匠太々太平樂
ニシテ、未ダ世人ガ厭ツガ如キ言語ヲ發シ、世人ガ憎ム

四
が如キ文字ヲ寫シタルヲ無カリキ。然ルニ客年南洋諸島ヲ巡覽シ先ツクサイ島ニ到リテ其土人減少ノ實蹟ヲ觀察シ、濠洲、新西蘭、フシ、島ニ到リテ「アングロ、サクソン」民族ガ跋扈強梁ヲ極メ、其固有ノ地主ヲ放逐シテ自家コレガ新主人トナリタルノ實蹟ヲ目撃シ、サモア島ニ到リテ其宗社顛覆シ活戲ヲ實視シ、北布哇ニ航シテ其國勢ノ蟬ノ脱殻ノ如キ始末ヲ見聞シ、心遠ニ買誼ニ擬シ屈原ヲ學バザルヲ得ザルノ場合ニコソ立ち到リタル。或又謂ハシトス、子ハ得々然トシテ自カラ詩人ナ

リト宣言シ、而シテ其文字ノ卑賤ナルト詩囊ノ膨滿ナラザルトヲ如何セント。誰レカ知ラン南洋時事一篇ノ紀事ハ悉ク是レ夢ノ如ク幻ノ如ク、正ニ是レ一篇ノ長詩賦ナルヲ。然レバ若シ夫レ明治七十年ニ當リ白髮脩眉ノ矧川子ガ漸ク世事ノ慳惚ナルニ倦ミ、俗羈ノ冗糲ヲ脱シテ一枝ノ鉛筆、一丁ノ行季、飄々乎トシテ再ビ南洋ノ列島ニ巡遊シ、歸來其得ル處ノ諸篇ヲ同人ノ間ニ示サバ、特ニ其詩囊ノ膨滿ナルヲ誇ルヲモアラシカ。何ニトナレバ此時ニ當レバ南洋ノ諸島ハ悉ク白哲人種ノ占有スル處トナリ、チヤトニク民族ニラテン民族

敬香云凄

敬香云好

敬香云徑

敬香云感

奈是悠悠行路何，由來身世太蹉跎。土酋墓畔瀟々雨，添得遊人暗淚多。新四

關途上
颯風、猿、雨、五、千、程、耳、熱、狂、濤、怒、浪、聲、船、入、海、門、多、勝、事、珊、瑚、礁、上、白、鷗、鳴、到布

咖啡、花、落、晚、風、香、噴、火、山、頭、欲、夕、陽、莫、向、土、人、尋、往、事、太、平、洋、水、碧、茫、々、布哇

島懷古
日、落、殘、雲、鎖、海、門、荒、村、風、物、易、黃、昏、秋、深、椰、樹、花、如、雪、埋、却、英、雄、未、死、魂、布哇

島懷甲比丹哥克峽事
閱得人情險似山，窮途奚復唱間關。嗟吾去矣成何事，熱帶園中三往還。

南洋時事附録自序。

予嘗て北海道、對馬、八丈島、瓦港、印度、臺灣、ラングーンに
關する所見を開陳したるありき。亦た是れ聊か心血の
澆ぐ處、而して殖産通商若くは外交に干係するものな
れば、特よこれを此處に登載し、以て南洋時事の附録と
なす。

明治廿二年六月。

矧川生誌るす。

南洋時事附録目次。

- 第壹章 北海道を如何に開拓して最も多く利益を見る可き乎。
- 第貳章 對馬島。
- 第參章 近南洋紀行八丈島致富策。
- 第四章 瓦港汽船航路と日本との關係。
- 第五章 亞細亞大陸に於ける今後の一新大獨立國。
- 第六章 臺灣論。
- 第七章 支那外なる第二の上海

南洋時事附録

●第壹章

北海道を如何に開拓して最も多く利

益を見る可き乎。

嗚呼嗚呼新西蘭の進歩に比較し其繁榮に對照し我北海道と如何せん。北海道は一葦の海峽を距て我本州に對し日本人の初めて此地に來住せしより今日に到るまで幾百年なるを知らず。

武田信廣が蠣崎氏を冒かして初めて松前を居城せしは今日より三百八十九年前の事なり。渡島國龜田郡龜田村八幡宮の神社は當初灰燼せし事あるが其回祿より今日に到るまで凡そ四百三十年にして其間の記録等尙現存せりと云ふ。

徳川氏の末世石狩の運上屋に吏員を駐紮して秋味(鮭魚の事なり)の事業を管理せしめ尋て元村(今の札幌村)琴似(今の琴似屯田兵營の近傍)に

江戸の貧民と移植して、開墾鮭漁の事に服せしめたり。王政維新の際、朝廷開拓府と置き、尋で開拓使と改め、本廳の地を札幌に相して新市街を拓造せしより、爾來爰に十六七年。此間の成績を問へば、當初熊狼狐兔の巢窟を排きて、豐平の鐵鎖橋を架し、豐平館の土木を興し、農學校を建て、麥酒醸造所、小麥製粉所、牧羊場、農學校園、育種場等と設け、五十七哩の鐵道を敷き、幌内煤田を發き、又小樽の大埠頭を架設したり。然れば其事業固より見る可きものありと雖も、予輩が聞かま欲しき問題は、北海道を如何に開拓して最も多く利益を見る可き乎の一項なり。

試みに札幌郊外の圓山に登り、眺を縦にせんか、渺々たる石狩の野、彌茫數十里、石狩の長江は、滾々として其間に流れ、地濶く天長へに、田疇墟落秩々として、畫くが如く、人をして濠洲、新西蘭の田舎の光景を懷想せしむるならん。其間村落の、箇々點綴するものは、山鼻、眞駒内、琴似、豐平、白

石、雁來、當別、江別等とす。然れども、石狩河の溪谷廣袤十百里、而して其墾成地は、全野の十百分の一に過ぎず。其間農産物の販賣市場も亦、纔かに札幌、小樽、石狩の三市にして、其人口も亦凡そ三萬に過ぎざる可し。札幌市内人口凡そ一萬五千、小樽凡そ一萬二千、石狩凡そ二千。然れば、這般墾成地の範圍は、極めて偏小なるものにして、其收穫物と消流す可き市場も亦、豫想外に偏小なるを知る可し。

這般小規模の農家が、其收穫物を消流する販路、即ち札幌、小樽、石狩の三都會すら、其市場は充塞して復た餘地無く、竟に空しくこれを畝隴の間に放棄するに到るものあり。近年當別の小豆、札幌近郊の玉蜀黍の販路に困みたる實例を見て知る可し。然れば農家の規模も亦自から偏小にして、隨て其利潤も豐かならず、時に農家の子弟をして或は利潤尠少なる事業に營々役々とし、晨に星を戴きて出で夕に月を蹈みて歸らんよ

りは寧ろ事業の活潑々地にして利潤の豊充なる鮭鱒漁業等に轉換せんやの感を懷抱せしむるあらん。然れば今日の状態にては北海道の開墾農業は甚だ報酬乏きものにして、且將來にも深く希望を屬す可からざるものに似たり。否これを成就するに方あり、策あり、方策とは何ぞや。請ふ謂ふ可くして行ふ可きの方策を聞かん。

(第一) 農業の規模を擴張する事。一反歩の畝に百時間の勞力を費して、小麦三俵の收穫ありたりと假定せん乎。正比例の原則に據れば一反歩に貳百時間費せば六俵の收穫あり、三百時間費せば九俵、四百時間費せば拾貳俵の收穫ある理なり。然れども一反歩の土壤の生産力に限りあれば、百時間費して三俵なれば二百時間にて四俵半、三百時間にて五俵半、四百時間にて六俵位の收穫あるは、これ實驗上の結果なり。然れば此の一反歩に百時間にて三俵の收穫あればこれに二百時も費すと

を罷め、他の一反歩にて復た百時間を費せば、是れよりも亦た三俵の收穫ある可し。又三百時を費すものとせば、又他の一反歩に百時間を費せば、これよりも三俵の收穫ある可し。語を易へて謂へば、同一の一反歩に三百時間費すよりも、畝を廣くして三反歩となし、一反歩に百時間宛費し、一反歩より三俵宛の收穫即ち三反歩より九俵の收穫を得る方が得策なりと云ふ義あり。これ予輩が農業の規模を擴張せよと云ふ事にて、即ち耕作地の範圍を廣くし、廣さでこなすと云ふ旨義を唱ふる所因なり。是れとても日本の如き土壤限りありて地價の貴き箇處にては行はる可らざる議論なりと雖も、北海道の如き土地廣漠たる處にては行ふ可き議論なり。借廣さでこなす旨義に、多人數の勞役者を要すべければ、宜しく物を喰はざる役夫、即ち機械を用ふ可し。然れども尋常の移住民にては西洋の高價なる農具を購求する能はざるを以て、北海道廳に

ては其移住民の人と爲りを検査し、充分信用す可く且將來に見込みあるものなれば、これを奨勵し、これを誘導し、且機械種子等を貸與するの法を設く可し、干渉主義に似たれども、日本人のこの位ならで、北海道に移住するものあるまじ。然れども予輩の希望する處は獨り是れのみならず、吾國有爲の資本家が相共同連合して大農業を興起せんと是れなり。若し夫れ日本古來の小農業法を輸入して是を北海道に應用するが如き者あれば、是れ予輩の太だ取らざる處なり。予輩敢て謂はん、とす、已む無くんば北海道に限り、速かに外國人の移住を許容し、外國の資本を投じて、これが開墾の事業に當らしめ、以て間接に日本國の財本を増殖し、且國內の金融を滑かならしめんと。然れども是れ謂ふ可くして行ふ可からざるの議論なりとの批評もあらん。噫、予輩口を閉ざして可なり。

(第二) 農物産の販路と擴張す可き事。今日農産物の販路は纔かに札幌、小樽、石狩の三小市街なり。而して此小販路すら業既に充塞せり。開墾事業の進暢せざる宜ならずや。予輩又前條に於て北海道農業の規模と擴張すべきを論ぜり。然れば、又此處に農産物の販路を擴張するを論ぜざる可からず。先づ這般の販路を内地に求め、北海道産の馬を以て漸次陸軍騎兵馬、競馬等に仕用する馬類と供給し、北海道産の麻を以て海軍艦用の綱具、細引等を供給し、北海道産の小麥粉を以て浦潮斯、徳島、蘇里江、ドビク河、マルウスリ河、アクリ河、イマ河、ビキン河の溪谷、金加湖、レフ、河、畔、ニコライスク、黒龍江畔の魯國鎮、臺兵營の麵包を供給せんことを希望するものなり。

布哇國は製糖の國にして、且土壤狭少なれば、農産物は大概他邦より仰ぐものとす。即ち馬鈴薯、蔞草の新西蘭若くは米國より、麥粉、材木、米國

より輸入するものとす。予輩は北海道の馬鈴薯、玉蜀黍粉、麥粉、蕎麥、特に蝦夷松材の販賣を布哇に試みんとを希望するものなり。果して新西蘭、米國等のものと競争し得べきや、今日にして斷言するに困心慮なり。と雖へども、將來に見込みあるものとせばこれを試みるも可なり。且つ今後ハ我國と布哇との間に直航の海船行路を敷く筈なれば、予輩ハ此の試験を舉行せんとを希望するものなり。

予輩ハ又才學の人士を支那、魯領、黑龍江地方等に派遣し、北海道物産の新販路を發見せしめ、且廣く各國の報告現情を參考視察して新市場と世界に求めしめんと希望するものなり。

第三 北海道に是れぞと稱する主要なる農産物を定め、専ら這般の培植繁殖を奨勵する事。彼處に玉葱を植へ、此處ハ甘藍を植へ、左方の三十坪に瓜と植へ、右方の二段歩ハ麥を植へ、東方に豆を植へ、西方に茄子

を植ふが如きものなり。これ在來北海道開墾家の爲す處なり。予輩ハ斯くの如き雜農家を廢止す可しと唱道するものに非らずと雖ども、北海道に是れぞと稱する主要なる物産を定めんとを奨勵するものあり。然れば世人をして絹と云へば上州とか、藍と云へば阿波とか、又羊毛と云へば濠洲若くハ西班牙、絹と云へば以太利、佛朗西と云ハしむるが如きものを北海道に定めんとするものなり。今日にても鮭、鯉と云へば世人ハ直に北海道ハ指を屈するを常とす。然れば農産物も亦これに倣ひ何かと云へばこれを北海道專有の如くなさしめ、世人として直ちに其供給を北海道に是れ仰がしむるが如きものを培植す可きなり。然れば如何なる物産を北海道に定む可きや、これ亦一問題なりとす。

北海道は馬に名あり、其種矮少なりと雖も、忍耐にして且活潑なる精神力に富み、加之神經の敏捷なるものなり。北海道産を以て第一となすの評

あり且近年洋種の種馬を移入して北海道馬の改良に従事せしより新
 冠近傍(宮内省所轄)の馬の如きの頓に豊肥を極めたりと云へり。倭我國
 の將來を豫想すれば漸次人力騰貴して馬力を以てこれに代用する
 なるべし。即ち牧馬の事業の將來甚だ希望を屬すべきものなり。然れば
 北海道の宜しく牧馬事業を以て諸般事業の大根本とす可し。
 又麻の北海道に能く産す。借これをも將來を豫想すれば我國の海運
 事業發達して帆走船の新造するもの漸次増加す可ければ綱具細引
 ツギンク等の需用も亦多かる可し。然れば麻を以て北海道の主産物と
 なし其事業を奨勵すべきなり。
 又魯西亞にては西北利亞鐵道敷設の大事業を計畫し且近時頻りに黒
 龍江地方警備の鎮臺を増加して漸次滿州朝鮮を經略するの志あれば
 其警衛隊鎮臺兵卒が喰用する麵包は悉皆北海道の小麥粉を以て供給

す可し。然れば小麥の能く北海道に産すれば之を主産物とすべきなり。
 (第四) 北海道の勸業吏員をして營業旨義を懷抱せしむる事。實利實
 益を一般人民に明示せんにより力めて豪放疎率の觀念を排除し入是れ
 計り出是れ慮り小心翼々たるを猶ほ商舖の主人たるが如くなるべし。
 蓋し開拓勸業の事業の一片の壯心客氣のみにては成就すべきものに
 あらず。特に予輩が北海道開拓に關し這般の弊風を洗滌すべきを所
 願するの抑も故なきとせざるなり。
 これを要するに自由放任旨義は正々堂々たる議論ならん。然れども如
 何に正々堂々なればとて絶對的に此旨義を北海道の開拓策に應用せ
 ば予輩は却て其是なる可なるを斷言するに困むものなり。固より人
 情の利益の存在する箇處は是れ趨くものなれば北海道裡農業の薄利
 について漁業の多益なるあれば人民をして強ひて農業に就かしむるも

十三
竟に放棄して漁業に歸すべけん然れども適當なる開拓の方針を指
點し、有利有益なる農業法を講陳し、或は之れを實地應用せんを世上
に勸告するに蓋し無益の事業にあらざるべし、予輩が北海道廳に希望
する處は他なし、自由放任を以て其本旨義となし、而して問々必要の場
合に際しては適宜の保護を授與する即ち是れなり、北海全道の大三角
測量圖を完成するも亦た北海道廳の責任なり、札幌より根室に至る一
直線の道路を開設するも亦た北海道廳の責任なり、石狩川の鮭漁業、千
島の臘虎獵に干涉するも亦た北海道廳の責任なり、其他北海道の農産
物を一手に購求し、且つ之れを販賣する會社の新設を計畫するものあ
れば、北海道廳は之れを周旋し、其組織方法等に関して嘴を容るゝ固よ
り可なり、又彼獸肉を凍冰して海山千萬里の遠國へ輸送するは、濠洲、新
西蘭等にて現時頗る經營せる處なれば、亦た其方法に倣ひ北海道の鮭

魚、鱒魚等を凍冰して内地に販賣し、漸く支那に輸出するなどて、新事
業と計畫するものあれば、北海道廳は其事業を成就せしめん爲めに、
相談對手となるなど、總べて絶對的に旨義理論に拘泥せずして臨機應
變の處置を實施せん乎。

天皇即位第三歳、相地蝦夷分巷、襟帶山河形勢壯、儼然自是北京都、札幌

●第二章 對馬島。

對馬の我九州と朝鮮との間にある一孤島なり、有明の高山中央に颯起
し、地勢礪礪にして田園特に少しとぞ、然れば島裡にて收穫する米穀の
總額は島人三萬餘の需用に應ずるを得ず、年々之れが輸入を他國に仰
ぎ、或は其瘠薄なる土壤を役々として耕作し、之れより收穫したる少量
の甘藷を以て常食となすものあり、其生計の貧窶なる時に或は予輩を
して憐殺不堪とせらるゝを聞くと、此島にては米穀の收穫一段歩に付一石

四斗あるものは上等の田地なれば、内地より二萬石の米穀を輸入することありと。是に於てか對馬支廳は三業傳習所、嚴原の漁業、養蠶兩傳習所、安神の製陶傳習所を設立したりき。然れども、這般が果して内地の養蠶製陶事業を競争し得るかを、熟考せざるべからず。對州陶器か新機軸を出さざる以上は、伊萬里、瀬戸、九谷、薩摩等の陶器に競争するも、終に壓倒さるや明けし。故に今後甚だ希望を屬すべからざるものに似たり。又養蠶事業とても、絶海の孤島なる山岳の間に漫生せる天然桑の葉を以て蠶を飼養し、之より生ずる繭を以て生絲を製造することなれば、如何んぞ内地の信州、上州等と競争し得べきや。且つ此の野生の桑とても漸次伐採し盡したりと云へり。然れり今日に當りては、宜しく這般の事業を廢止し、全力を他の將來に多望なる事業に應用すべけん。想ふに對馬の一孤島なり。其面積僅かに六十餘方に過ぎず。加ふるに

地勢極めて峻嶮、確なるを以て、固より農業を經營すべき地にあらず。然れども、其四圍を繞る所の海水、特に漁産と以て充實し、鰯、烏賊の如き、其個々出産額の絶大なるものにして、年々乾燥若しくは鹽藏して中國京攝の間に輸送するもの幾千萬なるを知らず。其他煎海鼠、蟻鱒、鮑貝、海藻の類も亦た極めて妙とせざるあり。然れども、之れ皆藝州、防州、長州、筑前等の漁夫が收穫するものにして、對州人の從事する處にあらず。聞くが如くんば、曩時對州侯の朝鮮貿易の買權を壟斷せん爲め、其人民の密賣を防禁せんとし、竟お封内に令して船舶の稍大なるものを建造することを嚴禁したりと。然れば對馬島人は遠く海上に航行するの方便を失ひ、爲めに漁業を經營するもの漸次減少して、竟お皆農耕の業に轉損すること、はななりぬ。然れども、前にも云へる如く、對州の土壤は瘠薄にして、石田に耕するか如きものなれば、以上の養蠶製陶、農業等ハ

漸く廢止し、唯漁業のみを獎勵振作する。最上の經濟と云ふべけれど、借て近く警備隊の配布ありたれば、這般隊士の宜しく北海道屯田兵の組織に倣ふべけれども、這般に、特に海産物漁業を以て衣食せしめ、以て對州を永遠に警備するの策を施すべし。佛帝奈破崙第一曾て英國に對し非常に備へん爲めポロシ地方の漁夫に各若干の俸錢を給與して、以て臨時の用に供したりと聞きぬ。假令之れを償ふ能はざるも、猶ほ臥榻の側、他人の鼾睡を容るゝに勝らずや。

○對州客中作。明治十八年十二月。

鎮西地脈趣海止、折奔對州忽崛起、右控鄂羅左朝鮮、其間相隔一葦耳、我生二十二春秋、雙鞋踏遍歸獎洲、名山大海跋涉盡、餘杖來投又是州、近聞英鄂薄此境、巨艦三桅相馳騁、不知廟謨何所嚮、無敢隻語及邊警、排手誰能拂妖癘、疾呼無復掣長鯨、變理有策人不識、恨殺關東伴狂生、君不見方今五洲爭

濕燥、東洋風氣亦不好、無乃前車戒後車、海山咫尺巨文島。自註巨文島距對州僅十餘里。

◎第參章。近南洋紀行。八丈島致富策。

明治廿年歲末少閑を得たり、會々漁船芳野號將に三宅、八丈、土兒島の間を巡航せんとす、乃ち越後の人五十嵐氏を伴ひ、一部の枕山詩集、カールイル氏の文稿を携へ、横濱に至りて之れに搭ず、時に十二月十四日なり。此日拔錨の定期なりしが、天候の甚だ峻惡なるを以て、翌朝に至りて初めて發港す。既にして雲行未だ收らざるに依り針路を轉して横須賀港に入る。乃ち船頭に上りて仰視すれハ、一峯の兀然として聳立するものあり、之を逸見山とす。山上にウヰル、アダムスの墓あり、アダムスの英國人にして西曆千六百年の頃我邦に渡來し、家康將軍に用ひられ、江戸に邸宅を給ひ、現時の横須賀近傍を所領したるものなり、予往年此山に登り親しく苔を剝きて其墓を吊せしことありき、因りて憶ふ今や世局

一變してアダムスが舊領地ある横須賀の汽船帆船の碇泊所となり、此處に東洋第一の船渠を開き、最大のクレーンを釣り、精巧の魚雷を沈め、強勁なるリギグンを編み、世界屈指の洋漆（ちきん）と埧塙を製出する箇處と化、成したることなれば、假りにアダムスを地下より起して逸見の山上より這般の風物を望矚せしめなば、其今古の感慨果して如何ぞや。惜むらくは予にアーヴィング氏の才筆なく、リップ、ファン、ヴァインケルと同一斑の談柄を作爲する能はざると。

海門潮怒響如雷、雪浪拍山山欲頽、萍跡半生猶未罷、亞當墓畔四回來。却說、此日天氣未だ嶮惡にして航行甚だ危険なれば、十五、十六の兩日の横須賀港に碇泊し、十七日拔錨せしが、西風甚だ猛烈なるを以て、更に相州金田灣に寄港し、予は一人此處に上陸せり。元來東京灣内にて碇泊に堪ふべき箇所を品川、横濱、横須賀、浦賀、金田、木更津、館山等あれども、金田

は最も西風を避くるに便なり。金田灣上、沙白く松青きの處、漁家鰯戸簾々懸綴すれども、未だ船客の休泊を供する茶屋等の設けあらざるを以て、若し夫れ這般を新設し、或は汽船の碇泊する毎に岸上より舢舨を出したらんには、此灣内に投錨する船舶も隨て増加すべく、且此地の繁華を誘致するの基ともなるべきか。

十八日未明拔錨、午後二時三宅島伊ヶ谷に達す。此島は東京を距る海上凡百二十哩ありて、周圍七里二拾八丁あり、伊ヶ谷の北緯三十四度餘に位し、入戸凡二百許あり、此地は灣形を存せども港をなさず、故に少く風の吹起るめれば、汽船は直ちに錨を抜かざるを得ず、且此地に上陸せんには、斷岸に沿ふて登るを以て甚だ危険なりとす。因に云ふ、元來伊豆七島には港と稱すべきもの一箇もあるなし、只大島に波浮と云ふ灣ありて、瓢の形をなし、和船を碇泊せしむるには特にお適當すれども、西洋形

船の入るへからず。然れども若し港口を少しく切り廣くれば西洋形船をも容易に碇泊せしむべく、又此港を修築することの天然の地形を利用するもの故、巨額の金員を消費するを要せざるべし。同村邊には此島の主産物たる柘植を植ゆ。又養蠶をなすものありと見へ、山崖水涯間ま桑樹の箇々亂生するを見受けたり。井水の甚だ乏しきを以て雨水を貯ふるため處々に蓄水桶を具へ、或は谿間の清水を汲みて飲用に供す。島内牛多し、野飼なれば其性頗る猛烈なり。之を使用するに先づ其角を切るを常とす。而して其角を以て釣魚の具を造り、鯉魚を漁るの用に供すといふ。又島にては土壤甚だ瘠薄あるを以て、十六七年間も樹木を植置き、地味の耕作に適するの候を待ち、之を伐採して薪となし、和船にて東京に輸送し、其土地に甘薯と種ふるを例とす。甘薯の島人の常食にして、之れを片々に横截し乾燥して貯蓄すと云ふ。願ふに錦城歌吹の海

に在りて芳酒、玉膾お飽くもの、未だ以て此絶海の島民が畢生飲食する所のものを夢寐だに知る能はざるべし。若し夫れ多情博愛の佛王顯理第四をして此状況を目撃せしめば、乃ち彼蒼を仰ぎて「希くは此民をして責めて、一日曜日だけ一片の鶏肉を喰ひしめよかな」と絶嘆することならん。此島にては米を産せず、麥を産出すれども其收穫甚だ些少なり。故に今此島のためお圖るお本年より一年四回の定期航海を内地と開きたるを以て、島民の耕作に従事して勞働に不相當なる收穫を博するよりも、寧ろ穀物を内地より仰ぎ、男兒は専ら漁業に従事し、此島固有の海産物を以て生計を營み、婦女は古來有名なる三宅木綿の紡織に全力を盡して、以て時勢の變遷に處するの經營をなすお如かざるなり。十九日風力前日に倍強す。未明錨を抜き舵を回へして風を豆州下田灣に避けんとし、瀛力を盡して北進す。未だ幾何もなく上等船室内に物議

を起し、相謂て曰く、這般の風力のために難を下田に避くるが如きは最も策の得たるものにあらず。宜しく八丈島に直航すべしと。往復辨論の末終に之れを決行し、乃ち進路を轉して八丈に向ふ。時ふ船舳の波動特に甚しく、早潮、黒潮の兩流域を經過したる際の如きは波瀾疾く撃ち疾く馳せ來りて、其船底に夏摩するの響宛ながら萬斗の小石を一時に投するが如く、爲めに意況をして轉た凄楚たらしめたりき。激浪特に甚しきの際は幾回か室内へ突入り、間ま煙筒上に昇騰したるを見受けたり。然れども風位は帆腹に對し直角に衝擊しけるを以て、船舳の快走すること矢を放つが如く、午後四時三十分早くも八丈島の八重根灣に到着したり。此灣ハ大賀郷に屬し、八丈島第一の港灣と號すれども、斷岸絶壁の間に船舶を碇泊せしむるものにしあれば、若し夫れ暴風忽にして吹起るあれば直ちに錨を抜き難を洋中に避けざるべからず。故に漁船の

此灣内に碇泊する間は毎ねふ石炭を焚き煤烟を燻して臨時出港するの準備をなすを例とす。予ハ船客一同と共に端艇に搭し岸に達し、錨岸を攀じ登り無難に上陸して一呼吸を吹きたり。會ま微雨霏々として來り、加之冥色將に合せんとするの候なるを以て、上陸人中過て岸上より滑り一時兩脚を潮水中に浸したるものありし事どもを追想すれば、今日猶且つ予が毛髪を竦然たらしむるものあり。岸に上り一土人を質して案内者となし、五十嵐氏と共に大賀郷の長樂寺に投宿す。此寺の住僧は明林玄澤と稱し、明人の後ふして其祖先ハ漂流して此島に寄着せしものなりといふ。同僧の長女を「花江」と呼び、次女を「ミツヨシ」と名け、其他一婦人の名を「雲江」といふが如き坐るに名稱の雅馴なると覺へたり。

宿八丈島長樂寺。醉後似同行五十嵐生。

杯土埋身定箇邊、平生事業有誰憐、與君同酌甘醇酒、幾雨蠻烟送暮年。

廿日朝餐後五十嵐氏と共に近傍に出で、小學校を一覽せしに、生徒凡七十名許り着席するを見受けたリ、科程は東京府下小學校と等一の由にて、現に按分比例の問題を出しありしに、何れも相當の答案を付し居たり、又英語學の初歩をも教授すといふ、同校生徒の名札を一覽せしに、奥山、沖山、菊池、浮田の姓のみ極めて多數にして、他姓を名乗るもの特に少し、聞く奥山は後北條氏の頃、武州金川の城主奥山宋林なる者が其城を失ひて八丈に逃れ入り、遂に同姓の祖となりしと云ふ、沖山の其家系詳ならず、菊池は八郎爲朝の從臣某の後にして、八丈第一の舊家なりと、浮田は中納言秀家卿の後胤にして、秀家は關ヶ原の敗後此島に流竄せられたるものなり、學校を出で七八丁にして、稻葉村に到れば大なる圃牛場ありて、縦一丁餘、横半丁許の幅員なり、圃牛の八丈人が無上の快樂となすものにして、毎歲孟蘭盆會に施行す、其傍に墓地あり、中央に古松

一株を植ゆ、之れを浮田秀家の墓標となす、嗚呼一世の豪傑今安んか、在る、雄魂黯々として遠波、究島の間に銷沈す、何ぞ夫れ慘澹なる哉、此の落魄の游子を、下て多情多恨の暗涙を、荒苔上、み瀝が、しむるものは、抑も非なる耶。

由來戒敗疾於風、也是當年小奈翁慷慨一杯和淚酒、南洋烟雨與英雄、墓地を出で、一老婆に面す、自から云ふ、齡八十なりと、後ち之れを島人お聞く、島人は大概長生にして、女子の齡八十に達するもの少しとなさず、流行病の絶無の姿にて、天然痘のみ近年に至りて、此島に輸入し來れり、と云ふ、畢竟島人は衣食住に欠くる處なく、他に憂ふべきものあるなく、悠々然として、一世を無事、み送了するを、以て斯くの長生を得るならんか、此邊の風物の、自から内地と之れと異にし、火成岩到る處に、點綴し、棕櫚樹蔭濃かにして、芭蕉樹葉と相交雜し、翠色、滴れんとする處、長髮紅

顔の婦女子が綿登たる口調を以て一曲の情歌を低唱するものあり、幾群の兒童が牛に横乗りして、江戸の旦那に逢遭する毎に鞭ち下りて敬禮するものあり、家々の甘薯焼酎將ふ熟して十斗、瓶に盈ち、島紬織り了りて貢租に充て、百戸千戸等しく日本天皇の廿一年を迎へんとす、何んが夫れ氣象の融々たる哉、然れども獨り恨む、古往今來三世紀の間、幾多草莽の英雄漢が千古の卓見を懷抱し、或は斬新の議論を唱へ、或は西學を攻究し、或は覇府の虐政を痛議し、或は書を著し、文を作りて知己を後世に求めんとする者、比々相踵ひて此絶海の孤島の間、に流誦する所と爲り、吊祭に至らず、幽魂依る處なく、空しく恨を寒原衰草の間に飲むの梅辻飛驒(加茂縣主)、近藤富藏等の如きものある事を。

"Perhaps in this neglected spot is laid,
Some heart once pregnant with celestial fire;
Hands, that the rod of empire might have swayed,
Or waked to ecstasy the living lyre:—"

But knowledge to their eyes her ample page,
Rich with the spoils of time, did ne'er unroll;
Chill Penury repressed their noble rage,
And froze the genial current of the soul."
—Gray.

稻葉の郷を過ぎ道と田間に取り、陂陀高下、行くこと凡そ半里にして一泓の流水あり、幅五尺許(八丈島大河の一なりと云ふ)清きこと齒を漱ぐ可し、流ふ沿ふて村あり、簇々として貳百三十戸あり、茅屋垣牆參差として向背相望み、竹樹鬱然としてこれを遮蔽し、機聲、鶏聲、犬聲、牛聲、讀書の聲、俱に綠蔭の中に在り、乃ち讀書の聲を便り、其發する處に到れば、門に榜して三ッ根郷學校と大書す、校舎の傍に村役場あり、三四の人士列席せり、予等は役場に入り、此等の人々に一揖して各般の問答をなす、斬髪斷行の始末、牛肉喰用の沿革等を聽取し、畢り、尋で學校を一覽したる上、校員に説くに八丈島少年の智力を啓發し、内地の形勢等を知了せしめ、

以て漸く時勢の變遷に應ずるの第一着の先づ地理學の科程を擴張獎勵するにありとの數言を以てし、恚て校舎と去らんとしける折しも一人の壯少年來り、村長の宅にて予等お午餐を餐せん事を申出でたり、依りてこれお伴われ筵席に就きたりしに、一杯の甘薯燒酎、酌みりと雖も主人が厚志に酌み取りて、特に味の濃かなるを覺へ、轉た人として桃源境裡お在るの感あらしめたり。因りて憶ふ本年より此島と内地との間に一歳四回の定期航海を開きたるを以て、唯恐る後年如何なる人物の内地より渡來して、這般桃源境裡と蹂躪し、此の天眞爛熳たる島人に教授するに文明的の詐術詭計を以てし、漸く其本性を殘賊するあらん事を而してこれを防禦するの方策の先づ島民の協合して、這般の人物と取り合はざる事と決定し、併して少年の教育を獎勵し、銳意其智識を擴充し、以て漸く内地の人と競争し、これを打勝たんとするの志氣を發達

せしむるにあり。予は此言を遺し、併して銀錢一片を小童兒に贈りて村長の饗應に酬ひ、同家を出で、再び流に沿ひ西山(八丈富士とも稱す)の麓にお傍ひ、行くこと凡そ拾町許りにして一の丘陵お出づ、寒草稀疎、其間石碑あり、刻字未だ剝落せず、歴々として讀むべし、羽倉翁(有名なる伊豆の代官にして、詩文お長じ、三十年前の漢學世界にて吏の風流なるものは獨り羽倉縣令あるのみとて、太だ名聲の噴々たりし人なりと聞けり)の撰文にして且書も亦其手筆に係るものなり、其大意に曰く、八丈島西山の麓と元乗山の間は平地あり、草木暢茂す、島人相傳ふ、古來海神の休息する處也と、然るに島民の増殖するに隨ひ、漸く土地に缺乏を生じ、竟お此の海神の林を開拓して疇圃となせり、爾後神湊(此石碑より坂路を下りて凡そ七町許の所に在り)に入らんとする船舶は俄然颯に遇ひ難破するもの尠しとせず、島民以て海神の崇となし、圃を棄て、神に委ねん

事を計る。余羽倉翁之を非として曰く、口碑に傳ふ、此島の人口五千に達せば食物給せずと。今や人口殆んど壹萬に垂んとす。食の給せざる知る可きなり。人類と滅殺して神を奉事する能はず。新に田園を開くは即ち神意を奉ずるなり。海神豈に怒るの理あらんや。海神をして果して怒るあれば余其怒を解かん」と。辭句極めて剴切。島人云ふ此碑建設以後颶風復た起らずと。碑に傍ふて坂あり、崎嶇峻峻、人を一て宛轉たらしむ。乃ち朝吟飛下すれば、其窮まる處を神湊となす。湊は正北に面し、危岸絶壁の間により。故に北風吹き起るの際、和船と雖も入る可からず。特に西洋形船舶の如き、碇泊し能ふ可きものに非ず。此日會ま北風遂々として吹き起り、驚濤駭浪空と排して至り、崖壁を激して人立し、轟擊噴搏雷霆の如く、雪霰の如く、誠に巨觀を盡くしたり。湊を去り前路を取りて大賀郷に返り、宗福寺を訪ふ。住僧は予等を款待して爲朝の遺物を示せしか。

其中に古皿、硯、鎮西八郎爲朝と書せる達磨の繪ありき。此僧は則ち爲朝の後胤なりと。此島へは舊幕府の頃、和船八丈丸が年一回流罪人と島人の使用品とを積込み、例年十一月頃に到着する常期なり。故、島内には十一月を以て決算の時期となせり。且十一月頃は島紬を織り了るの時期にして、兼て歳末に近きを以て、現今に至るまで此成規を履行せり。故に今春賣却せし米穀の代價も來る十一月ならでの受領する能はざるを以て、賣人は壹石五圓位の玄米も勢ひ六圓五拾錢位に賣渡さざる可からず。以て賣者買者共に不利益なるを知るべし。此不利益を醫せんには島内に年中相當の流用資本を用意するあり。且つ流用資本の缺乏せるに因り、島人は毎に物品と物品とを以て賣買するを以て、島内にて創起すべき事業も自ら發達せざる者少しとせず。然るに本年より内地と一年四回の定期航海を開きたるを以て、此島も亦漸く内地の經濟世

界の感觸を蒙むる可き事なれば、隨てこれに應ずるの計畫と施さる可からず、然れば今此島の爲に計るに先づ流通資本を用意するにあり、而してこれを用意する方法は荷爲替法を設くるを可とす。此荷爲替法の資本金は先づ此島の輸出入總計五萬圓内外(輸出凡そ貳萬五千圓輸入貳萬七千圓)なるを以て、其半額即ち貳萬五千圓の資本金あらばこれを設くるを得べし。明治十八年の調査に據れば島内に牛貳千九百頭存在するを以て、假りに一頭を八圓と見積るも、貳萬三千二百圓の資本の格價を所有し居れば、他の貳萬五千圓位の資本金の島民に取りて容易のことなるべし。又此島には港灣と稱すべきものなし。然れども大賀郷の八重根灣、三ッ根郷の神湊、中野郷の愛ヶ江の三灣の内一箇を撰定して修築せば、西洋形船舶の碇泊に供するを得べし。然るに這般三郷の隱然黨派をなし、自己の港灣に船舶を碇泊せしめんとし相競争するを

以て、現今の狀況にては三郷協同して一港と修築するの理論の言ふへく行ふべからざる者に似たり。然れども此島にも亦他の小笠原島若くは對州の如く島廳を設置し、島司をして之を所置せしめなば、島民の温順にして能く支配者に服従するの性質なるを以て、獨り築港の策のみならず、道路の開鑿も諸般生産の事業も容易に施行するを得べし。此島の主産物の石花菜イソゲ、硫黃イソゲ(性質極めて精良にして近年堀採し始めたる者也)八丈縞とみす。元來八丈の地たる絶海の孤島にして、販賣市場の隔遠なるを以て、其最主産物は容量の最も些少ある者にして價直の最も高貴なる者を撰定するにあり、即ち八丈縞の這般の注文に應ずる者あるを以て、島民の是が紡績に全力を盡すを可とす。然るに此縞の聲價は頃來其染方の漸く粗惡なるに因り頗る下落せりと云ふ。然れば是を改良せんには在來の如く戸毎に染むる事を絶廢し、一村内にて染方に最練熟

せる者三四名を撰定し、之を専門の染工となし、全村使用の絲地染方を請負はしむるにあり、又前にも云ふ如く本年より一年四回の定期航海を内地と開きたるを以て、島民は稻作に従事して労働に不相當なる收穫を博し、兼て粗悪なる米穀を收むるよりも、寧ろ這般を内地より仰ぎ、稻田を填め立て、大に桑田を興すの計畫をなすに如かさるあり、廿日夜、月菊亭山の峰頭に懸り、棕櫚樹影婆娑たる處、少男少女三々五々相會し、漸く集りて七十餘名となり、響々たる大鼓の音を聞き、躍り始めたり、其躰裁ハ猶内地の盆躍の如く、其唱歌ハ萬歳節と主水口説とを折衷したるものと如し、歌に雅訓なるものもあれども多くは極めて野卑なるを以て、予は試み、其野卑なるものを改め、左の歌ハ歌を作り以てこれに代へ、周く島人をして吟唱せしめんとす、知らず島人これを容るゝや否や、

一ツヤ、人ならば都みやこの人も八丈の島のもので、違ちがひなし、
 二ツヤ、ふねの往來ゆききの日に増せば、これに伴ともなふ覺悟かくごせよ、
 三ツヤ、みなとを造つくくる工事いごの諸もろのことはじめなり、
 四ツヤ、四方よの海邊うみべにすなごりし、干はして鹽しほして送り出せ、
 五ツヤ、いとをり縞しまを染そむるには、色いろ艶つや粗末そまつおそるまいぞ、
 六ツヤ、むだか田植たうひハ打ちすて、桑くわを植つふるが徳とくようぞ、
 七ツヤ、なにはともあれ五ヶ村は、心こころを協かへてことをせよ、
 八ツヤ、やまの硫黄いっわうをほりいだせ、海うみの石花菜いそご採り出だせ、
 九ツヤ、こどもを持もてる親おやたちは、文讀ぶんよみむ事をしめべし、
 十ツヤ、富みさかへ行く八丈やえさま、行末ゆきまついと目出度めでたけれ、
 吁嗟あはれ菊亭きくていの山、愛あいヶ江えの水、何なにぞ其名稱なづなの雅訓みやこごにして、山水さんすいの明媚めいびなる哉、
 多謝たしゃす、八丈やえの山、靈水れいすい伯はくよ、能よく此こゝの汗漫あせまの游子うきこが爲ためめに幾多いくたの吟境ぎんけいを

開きて詩料を供したるを乃ち以上の致富策を立案してこれが厚意に酬ひ併せて予が鴻爪を此島に印したる紀念と爲さんとす、知らず山靈水伯幸に嘉納するや否や。

二十一日(晴)正午予等一行本船芳野丸に還る。船乃ち瀛罐の運轉を始め、八丈島八重根灣を出で海岸に沿ふて駛走し、愛ヶ江灣に入りて硫黄を荷積し、尋で針路を正南に取り直ちに土兒島に向ひて發航したり。午後七時青ヶ島の山影を左舷に眺め、煙波杳靄の間に經過しける折しも、右舷の方には密雲地平線上に列布し、海霧乍ら模糊として風雨鍼も亦ただ下降し、天候陰惡の特兆を現出したれども、船の荒天區域に在らざりしや、幸にして何等の出來事にも逢遇せず無恙一夜を送了したり。

二十二日(晴)拂曉缺月西に淡き處、土兒島の三峰巒を認め得たり。午前十一時島を距るゝ凡そ三哩の處に到る。乃ち瀛罐の運轉を停め、本船より

端艇を卸下して上陸の用意をなしたり。此時端艇に入りたる者の東京府廳の官吏加藤某並に予等一行二人なりき。既にして端艇は島岸に達したれども安全なる上陸場無きを以て、三名議決の上、艇を能ふ可き丈け近く陸岸に漕寄せ、夫れより海水中に飛び下り、滿身皆潮を被ふりて上陸したり。是れより先き土兒島上陸人の運名如行として一時世論の噉々たりし玉置氏以事十二名の成何は如行なりしやと、予等一行は胸中悸々として待ち居たるに、端艇の未だ陸岸に達せざるも早くも島内に一抹の煙火乍らふ起りたるを以て、先づ彼等の無事安寧あるを知り、尋て彼等の茫然たる温顔と健全なる風采とを親しく目撃したるを以て、一行皆大満足の思をなしたり。予輩は又彼輩が井を鑿ちて恙無きを見て満足したり。予輩は又彼輩が周廻六里、二千の民人と保容すべき新陸を利用したるに満足したり。彼等が島中にて耕作に適應す可き平原

四箇處を發見したるも満足したり。彼等が温泉を發見して其快樂を増殖したるに満足したり。彼等云ふ島内にて牧畜の事業を擧起す可しと。予輩は此島の牧畜に適應するを見て満足したり。彼等云ふ島内にて藍砂糖の栽培を試験すべしと。予輩は土壤特に氣候の這般の栽培に適應するを見て満足したり。彼等云ふ島内に生息する幾十萬の白鷗の羽毛を利用せんと。予輩は這般羽毛の婦人帽子の裝飾に使用すべきものなるを知りて満足したり。彼等云ふ沿岸の鯨魚を漁獲し其鱈を輸出すべしと。予輩は彼等が一時間に十三尾の鯨魚を漁獲したるを以て沿岸の鯨族の無盡藏なるを知り満足したり。彼等は云ふ沿海の蠅蛹を捕獲して背甲を輸出せんと。予輩は這般の背甲の海岸沙上に曝曬せるを目撃して其言ふ處の誇大ならざるを知り満足したり。而して這般の満足の最大なるものは彼等が克く外洋遠征の先鞭を着け、一山一水の間を踏

踏せる懦夫情夫の長眠を攪破したる是れなり。吁嗟天命能く這般の人士に斯の大満足を極盡せる新陸を授與して以て其勞役に酬ひんとす何んぞ夫れ公明正大なる哉。

"Thy mercy sweeten'd every soil,
Made every region please." — Addison.

予輩は又世論が彼等の運命如何、島中飲用水有無如何の問題に對し、嗚々たるに大満足を表明するものなり。何んぞなれば斯の生民過多、飢餓求食の秋に際するも、猶ほ且つ遠征移住の氣概に薄弱なる民族中に、這般の大丈夫兒を現出したる事なれば、社會は力の及ぶ丈け能ふ丈け這般の人士を庇輔贊翼せざる可からざればなり。予輩歸航に當り、會ま彼等一行中の二士と船を同ふしたり。乃ちこれに世論の彼等を庇輔する云々を口説いたるに、彼等齊しく感動し頭を抵れ敢て以て一言を發せざりき。既にして曰く、我等東京に着せば即ち新聞紙上に廣告して

一行の無恙安穩なるを社會に報道し、以て輿論の一行を愛憐するの厚
を多謝せんと、吁嗟彼等豈に無情冷淡なる冒險者ならん哉、豈に暴虎馮
河の蹈危者ならん哉、(本文中「本年」と記載せるは明治廿一年を指す)

◎第四章。瓦島汽船航路と日本との關係。

會社の創立と云ひ、資金の用意と云ひ、開墾の事業と云ひ、鐵道の敷設と
云ひ、何れも皆國の生産力を發達せしむるものにして、頃來我國の現状
を觀察すれば、内外の刺戟に因り、民人箇々の企業心の頓に發達して、殖
産興業の四字の漸く至大至剛の勢力を逞ふせんとするの傾向あるが
如し。然れども後日諸般の事業は如何に興起するも、之を消費し之を販
賣するの好市場あきに於ては、所謂寶の持ち腐りにて、有れども無きに
等しきのみ。然れば今日より周く各國を通覽して、廣く新販路を世界に
求む可きは誠に必要ななりと云ふ可し。然れども、良し目前現時は、良好の

販賣市場にあらざるにもせよ、其將來の趨勢を推測し、果して彼此の關
係を厚くせば、漸く利益の測る可らざるものありとせば、之が地勢を鑑
み、之が人情を察し、漸々彼此の關係を密接ならしむるの方策を發見す
るに、敢て大早計と云ひ、可ならんか。

吾日本の年來東隣の米國、西隣の支那、北隣の露領浦鹽斯德港と往來通
商し、且南隣の濠洲新西蘭も亦頃日大に世人の注意を惹起し、其商業上
の景況を觀察せんとして、此の渡航する者比々相踵ぐほどの次第なれ
ば、數年を出ずして日濠兩國の關係は漸く厚く漸く密接に歸着するや
明なり。然るに近く我東隣に位する大邦土にして、彼此の直接航路は早
く既に開通したるにも係らず、未だ深く我邦人の注意を惹かざるもの
は、予輩の甚だ不可思議を感ずる所なり。其は何れの邊に在るやと尋れ
ば、英領コロンビヤ州(British Columbia)是れなり。

英領コロンビヤ洲并にワンツィー島以下略して瓦島と記す。は加奈陀の西部に位し、石炭黄金の無盡脈と儲藏するロツキヤの大山麓は峨々として其東方を界し、フレイザの大江の滾々として中央を貫き、幾多の支流其間に曲折して兩岸到る處に千年の雄木良材の森々として暢茂し、木材貿易にては世界中此の地方の右ふ出る者は特に妙なりと云へり。其沿岸は赤道北路大潮流の洗ふ處と爲り、加奈陀本部に比較すれば氣候極めて和煦温暖にして、牧草能く繁茂すと云ふ。然れども州内
 到る處人煙太だ稀疎あして、天徒に長へに地空しく濶く、鷄犬聲絶ち、行客の耳官に達するものは伐木の音丁々たるに過ぎざるとならん。然るに此地方が將來果して繁華熱鬧を極むべき乎。我物産の好販市場と化
 成するまでの人口繁殖に至る可き乎と問ひたらんには、予輩は直ちあ
 積極の應答をなす者あり、何となれば物躰の力は抵抗の最も少なき分

部を求め、其箇所に向て漸次に移動するとは、理學上の大原則なるを以て、人界の事物も亦斯くの如く、人口の稠密ある箇所より人口の稀疎なる箇所に向て漸次移動し、競争者の多き箇所より競争者の少なき箇所に向て漸次に移動し、氣候の凛冽なる箇所より其和煦ある箇所に向て漸次に移動するは自然の勢にして、加奈陀本部の繁華は太西洋岸の人民と共に次第西漸して太平洋岸に寄せ來る事なる可し。爰處に英領コロンビヤ并に瓦島の加奈陀本部の西方に位し、太平洋岸に在りて、山河千里形勝雄偉、而るも人口は則ち甚だ稀疎なり。然れば大膽ありて而かも緻密に冒險にして而かも實着なる「アングロサクソン」民族が曠世の企業心を飽しむるに足るべきや必せり。實にや米國の詩人バークレ
 氏が「西へ西へと邦國の行路は進み行くなれ」と口詠みたるの詩人高妙の想像力と物理界の原則と能く相協合するものと云ふ可し。且つや

近頃加奈陀太平洋鐵道線路も落成して州の東西を横截したれば英領
 コロンビヤ并に瓦島が漸く繁華熱關の新市場たる可き天利人則の
 根本協ふものと云ふべし。然るに此地方と我日本と交通の關係は如何と云ふに近く加奈陀本部
 と瓦島間の鐵道線路落成と同時に瓦島日本間の新航路を開き以來
 は我日本より北米大陸への航路を短くし航費を減じたるのみならず
 歐洲と日本との往來にも一層の利便を増し殊に加奈陀千里の地に我
 物産の新販路を發見したることなれば瓦島の新航路の日本前途の趨
 勢に密接して其關係の重大なること論を竣たずして明なり而して其
 關係の最も重大なるもの何ぞや曰く第一日本農業上の關係第二
 北海道との關係第三日本人民の移住是れなり。
 (第一) 日本農業上の關係 地の形勢に従て人口を保持するの力を察

すれば日本は寧ろ製造貿易に適する者の如くなれども地方未だ全く
 盡き衰して殘る所のものあれば之を開墾し之を耕作し以て國の財本
 を増殖すべきの固より當然のことなり然れば今我國に於て未だ地方
 の盡きざる箇所何邊に在るやと尋れば奥州北海道是れなりと答ふ
 可し蓋し泰西流の大農業策を輸入して之を應用す可き地方ハ八十
 四州中獨り奥州と北海道の平原あるのみにして此平原に最も適する
 所の農業は牧畜なり而して所謂牧畜の第一着ハ先づ日本在來の家畜
 の種類を改良し其品質を高尙ならしむること緊要にして種牛の如き
 何れの地方より輸入して最も得策なりやと問へば品質上よりするも
 經濟上よりするも主として北米洲を推す其の内にも東岸マサチユセツ
 ツ州邊の最良の名産れども日本へ送るに遠路の運送賃に妨げられ
 て意の如くならず故に是れまで日本に來るものハ桑港近傍よりする

の旅行せむも、果港地帯の氣候未だ温暖にして、四時特章亦富み三冬
 中家畜を放牧する事あるは、是れを天氣寒烈なる奥州北海道の曠原地
 帯に、其健康上は必ず多少の害ある可ければ、寧ろ英領
 沖ノ島、北緯四十八度半より五十二度の間あり、即ち露嶺樺太島
 の中緯を緯度に向ふ故に、其氣候は温暖潮流の爲に同緯度の地方に
 比較すれば、特に温帯に属する。我々奥州北海道の氣候は格も酷類する
 著しき上、其必要なる我々我國將來の天農業を興げ可き地方は奥州北
 緯の平原部にて、牧畜の地あるべし。而して其業は最も大切なる
 種牛、英領の白頭牛、并に瓦島よりするを最も得策を以てすれば、日
 本前途の二大事業たる、泰西流の農業、並に瓦島汽船航路を容易ならざ
 る關係も亦甚く、知悉可なり。故に其業は最も大切なる

第六 北海道との關係。北海道は日本の亞米利加なり、日本新農政策

の太試験場なり、若日本の剛強なる子孫を産出する箇所なり、北海道の
 日本致富上に關するや、大なりと云ふ可し、而して過去現在未來共に同
 道の殖産上に著しき者は、沿岸所在の無盡藏たる海産物にして、其大販
 路は清國なり、而して近來その海産物を上海以北に輸出するは、少なか
 らず、雖ども以南の地方に未だ至らざる處多しと云へり、畢竟運搬
 の便宜を乏しきが故ならん、若し北海道海産物の中心市場たる
 函館港より香港まで直航の定期汽船ありし、れば、其物産は支那の南
 部に漸く販路を發見するや、疑ある可らざる、爰に加奈陀太平洋汽船の瓦
 島より我々横濱に至り、夫れより香港に渡航する者なるを以て、若し此航
 路を少くも變更し、横濱に代ふる、函館寄港のことも、亦北海の海
 産物は、紅毛支那の南部に侵入するの道を得べし。

借瓦島汽船を函館に寄港せしむるの議論の素より無稽の空想にあら
ず何と云へば第一函館の北邊に在るを以て瓦島より横濱に到るより
も其航程を短縮するの便利あればなり第二桑港太平洋汽船の在來横
濱との間に定期航海をなせるを以て加奈陀太平洋汽船の寧ろ横濱以
外の開港場との間に定期航海を開くを以て得策なりとなせばなり第
三日本潮流即ち黒潮の奥州北海道の沿岸を流し平均一時間二海里乃
至三海里の速力を以て北東の方向に流るるを以て横濱より米國に航
海する船舶はこれに乗じて船の進度を増殖せんとし故らに北海道の
沿岸を迂廻するを例とせり然れば瓦島汽船が香港より歸航するに當
り函館に寄港するも些少に迂遠と云ふ可からざればなり
却説前項に論述したる瓦島汽船と日本農業上の關係とを對照すれば
此大農業の今日尙未だ地力を盡さざるの地方即ち奥州北海

道の平原に於て實施すべきものにして其の種牛は瓦島近傍より輸入
するを以て得策なりとせり然れば之を函館港に陸揚げすれば是より
直ちに奥羽并びに北海道の牧畜平原に送附し得べきを以て其間太だ
運搬の費用を省略する處あらん且つや青森東京間の鐵道落成後は北
米國より渡來して函館港に上陸したる歐米の中等以上の乗客は喜ん
で日本内部を見物せんとし青森よりの汽車を搭じて東京に到る事を
らん然して此等の人士が其間消費せし處は日本國土内に落つるもの
なれば是れ亦偶然所期せざるの利得に非ずや故に今試み此事業を成
就するの順序を云へば先づ函館市民をして瓦島汽船の寄港に付き利
益なるを悟らしめ市民共同して港灣の改良特に波土場の長大に
て堅固なるものを新造し灣の西岸龜田川の水源に樹木を増植して其
流砂を天然に防禦し防砂の工業は落成したりと傳聞すれども固より

以為るを以て遠大長久の計畫に非ず、人為の工業を設成したる上は、
 同時に天然の防禦策をも爲さる可からざるや必せり。以て大汽船の往
 復を次第に便宜ならしめ、而して後全市民の名義を以て、加奈陀殖民政
 府並に瓦島汽船會社と談判を試みるに在り。其成否の固き期は難
 也。雖も雙方利益の所在を明にするに於ては、早晩その實施を目標す
 るの日ある可きと予輩の斷信して疑はざる所なり。

(第二) 日本人民の移住と海外遠征の氣風は内外の刺戟に因りて我人
 民の腦裡に浸染し來り、輿論等亦北米合衆國を以て移住に適する地
 方と認るもの多し。然れども元來北米合衆國の歐洲各國人民の間屋
 場、の如きものなれば、我人民の現在ある腦力、身體にては、目前西洋民
 族と競争すに未だ必しも全勝を期し難からん。然に幸なるは、爰に加奈
 陀の地方は、山河千里、平原茫茫、日本人民が容易に他の競争に勝れず、

也。安んじて業に就く可き天與の樂土を與ふ。日本の處は、年々四十
 萬計の増殖を以て、其溢出的地方は他國に仰かば、避け可からざる要用は、
 之其地方は氣候甚だ嚴寒ならずして、住民は少く、競争者甚だ多からず、
 亦て交通往來の便利は乏しからざるものを探はざる可らず。而して今
 や加奈陀の地方は、正しく以上諸般の強弱は、叶ふものなれば、日本人民
 將來の移住地は必ち此方に向定まらざらん。即ち瓦島汽船の日本
 人民前途の進退は關係するや、大なりと云ふ可し。世の有志者當に注
 意す可き所の事なれば、此の如き事なれば、注
 論を去り論じ來れば、予輩は日本の公衆并に當局者に希望するも、我日
 本と英領土との間に在る瓦島との關係を著々密接にするの方策を計
 畫せし事を以てするものなり。而して其第一着は、方策に二箇の名譽領
 事、を以て、此の地を以て、最も大切なることならん。元來名譽領

事を成る者は其地方に永住する外國人にして、名譽財産に富む者を撰定し、之に領事の責任を囑託する者なり。故に其報酬の特に些少なれども、撰に當りたる者は自己の面目名譽の爲に喜んで之に應ずる例あれば、我政府に於ても之れが爲め、特に費用を懸るゝにも足らず。唯その人物を撰ふる瓦島未開の地方に在て事を成する者なるが故に、他の英佛諸國に在勤する領事とは自から風を異おし、外交上の機智を以て得意を爲すよりも、寧ろ生産上の事業に通曉する人士おして、時々其所在地方の農商況を綿密に報告して、彼此の關係を密着ならしめん事を是れ力心るが如き者を所望するのみ。

之を要するに我日本と英領コロンビヤ并に瓦島との關係と密接ならしむ可きは實に物理學人事界の大原則に叶ふものなるが故に、予輩は以上の論旨を記述して之を日本公衆の輿論に訴へ、之を我生産社會の

企業心に訴へ、之を理財學家の裁判に訴へ、以て公明正大虚心平氣なる批評を乞ひんとするものなり。是れ豈お詩人の妄想ならん哉。

一右一編は明治卅年五月編纂する處なり、全廿二年六月我政府は瓦港に領事館を創設し、領事と派遣したりき。

◎第五章 亞細亞大陸に於ける今後の一大新

獨立國

ヒマラヤの山海を抜くと二千九百丈、峯頭の雲汁は流れてグンジス、インダスの兩大江となり、汪洋として大荒の間お屈折し、流域萬里、沃野洪潤、牛乳湧き、蜂蜜滴れ、眞箇に天下の寶藏、亞細亞内陸貿易の衢路、是れ南中北の三天竺にあらずや、想ひ見るセミチ、ク民族の精粹は發して梵文となり、放ちてサンスクリットの開化となり、婆羅門是處に法を唱へ、釋伽是處に經を説き、其勢力の餘す處、金碧設色、炫耀眼を奪ふの伽藍となり、

玉櫻花暖かにして綾羅を競ふのゴルコンダ、パトナ、ラクノ一の宮殿と
 なりつるを、然れども全盛は繁華となり、繁華ハ奢侈となり、奢侈は柔弱
 となる、是れ風俗の次第なれば、さらぬだ、なつ夏なつ瘦なま奢侈と氣候と不因りて
 一つつあり、印度人は、北方雪霜の間に鍛へられたるアフガン人、莫臥
 兒人の攻め滅す所となり、アフガン人、莫臥兒人は彼のマーケット、ドレ
 トンの徒ら兒、餓鬼大將たりしロバート、クライヴ(英人)ふ打ち敗ぶられ、
 上下南中北の各天竺は敢へなくアングロ、サクソン民族の手に落ちぬ、
 英人既に印度を取れり、是に於てか家を舉げ踵を尋ぎて是處に移住し、
 道路を設け、鐵道を敷き、電線を張り、製造所を建て、總轄の政府と開き、
 一の法律を布き、今や此の大半島ハ宛然一箇の新英吉利と化成したり、
 誰れか料らん、自國の滅亡、英人の移住ハ印度人民の間に愛國興國の氣
 概を發揮せしめ、道路の開設、鐵道電線の延長、製造所の建立は印度人の

智力を擴大し、其生産力を増殖し、總轄の政府、畫一の法律ハ多年探
 分裂したる印度諸民族の大團結を促致して、以て今後の間ハモミチック
 民族の一大新獨立國を亞細亞大陸の間に見るべきに到らんとハ
 印度は英人の所有となれり、印度人の不平なり、故に今より三十二年前、
 即ち西曆一千八百五十七年、印度人は兵を舉げて所在の英人を攻め、
 然れども此の一舉の張本人たる印度備兵(印度人にして英人に備はれ
 兵卒となりたる者)が戈を倒にして英人を襲撃したるハ、實に彈丸ハ脂
 肪を塗抹せよと命ぜられ、此の脂肪は必定牛類より製造せしものなら
 ん、牛類は我人が神明と仰ぐものあり、我人が神明を屠殺するものは我
 人が仇敵なりとて、一片宗教的の狂氣より由來せしとなれば、假令此の
 叛亂が長續きすと假定するも、其實直ちに鎮定に歸したり、智力の發達
 と共に竟にハ鎮定消滅すべき筈なり、然れども眞成なる愛國心の發達

と○智○力○の○進○歩○と○生○産○力○の○増○殖○と○國○民○の○大○團○結○よ○り○由○來○し○た○る○獨○立○興○國○の○舉○兵○は○假○令○ヒ○マ○ラ○ヤ○山○を○し○て○土○砂○と○な○し○グ○ン○ジ○ス○イ○ン○ダ○ス○の○兩○江○を○し○て○北○流○せ○し○む○る○も○竟○に○鎮○定○消○滅○す○る○能○は○さ○る○こ○と○な○ら○ん○
印度人は未だ真成ある獨立興國の義兵を擧げざるなり然れども予輩は其の擧ぐべきものなるを確信す何にを以てか確信する曰く這般を促致する幾多有形無形の源因あればなり

(第一) 生○産○力○の○増○殖。英人印度に入れり鎮道を設くと一萬四千三百八十三哩電線を張ると三萬〇〇三十四哩郵便線路と開通すると五萬〇二百八十一哩ホムベ一所在に木綿製造の事業を興こしこれを輸出すると我金貨二千四百〇七萬六千圓(明治廿年中此等の統計は本年發兌の政治年表に據る)ベンガル所在に製麻事業と開きこれを輸出すると一千八百三十五萬千餘圓其他麥米茶藍咖啡等の大植付場を開拓し

盛んに印度土人を使備しつつあれり加之ならず印度銀貨の下落にも係らず其購買力は不思議にも低減せざるを以て此の事は廿一年八月發兌のフォルトナイトリレヴェー雑誌に據る印度國裡の諸般生産事業は競ひて發起したり又最近の報告に因れば首都カルカッタ府よりピラスパ一の都邑を経て中部の大市ナグプールに到る鐵道を新設しつつありとのとなれば其の間六百哩の麥隴を新開し得べく隨て幾萬の土人に職業を與ふるなるべし既に然り英人の土人に職業を與へたり土人の衣食は漸く豊足せり衣食足りて禮節を知り智力漸く發達して愛國の念漸く養育し竟に獨立興國の義舉となる嗚呼英人は印度を征服し印度人を使役し而して暗々裡に印度人の獨立の補助しつつあるものなり英人豈に印度人の獨立を補助するものならんや否千古萬古これを治服せんとするものなり果して千古萬古これを治服せんとせ

ば、印度國裡なる汝が電線を断て、鉄道を毀て、製造所を棄てよ。断つ能はざる耶、毀つ能はざる耶、棄つ能はざる耶。然らば印度人は自治せんのみ、獨立せんのみ。

(第二) 智力の發達。

スベンサー著の社會學中、タイムス新聞より一引例を拔萃せしものあり。曰く印度カルカッタ大學にて印度土人に小説アイヴァン・ホー中の意義を試檢し、デモクラット(民主主義家)とい何ぞやてふ一問題ありしに、印度學生ハベッチコート、ガヴァーノンメント(女天下)なりと答へたりと。嗚呼是れスベンサー翁が印度少年の頭腦中には所謂民主主義家てふものの甚だ存在せざる一例となせしも、今日豈に夫れ然らんや。印度國中一百拾五箇の専門學校、一萬一千八百餘の學生は英學を脩め、英書を讀み、スベンサー社會學の九十六頁目に到り云云の引例を見て或は隔世の感を爲すならん。デモクラットなる語の業既に彼等

の通曉する處となりしならん否、此語の深味の理解されいならん否、此語中の人たらんとするの念慮を發揮したるならん、且つや英人は印度土人をして國內の政務に參與せしめざらんとし、故さらに嚴格艱難なる官吏登庸試験を施行せり。是に於てか印度少年は奮勵力學して之に應ぜんとし、一字と曉りては事を知り、二字を解して道理を辨じ、三字四字五字、愈々曉りて愈々智力を開發し、七字八字九字、滿腔の感慨は滾滾として湧出するならん。彼等にして試験に及第すれば尙ほ可なり、然れども英人の故更らに及第せしめざるなり。是に於てか落第の徒は不平家となり、煽動家となり、游侠家となり、時に或は一潮多感の涙をハイドラバッドの舊趾に灑ぎ、デリーの古都秋深くして、椰樹花雪の如き處、當年の盛事を追想して革命獨立の奮慨を發揮せん。嗚呼英人は印度國裡に銳意英文學を敷かんぞす。英文學は自治人民の文學なり、既か自治人民

の文學を印度遍處に敷き而して印度土人の自治たらしめざらんことを希圖す。英人夫れ妄なり。嗚呼英人夫れ妄なり。

(第三) 印度諸民族の大團結。印度の滅亡したる原因如何曰く。國裡諸民族の揆離分裂これなり。國裡の諸民族の相嫉妬せり。相反對せり。是れ千秋の奸雄ワレレン、ヘスチングス(英人)が乘じて以て印度を征服したる所因なり。既に然り英人の千古萬古印度人を治服せんとし、總轄の政府を開き盡一の法律を布きたり。總轄の政府盡一の法律。是れ豈に暗々裡に印度諸民族を一國體となさしむるものにあらずや。英人の開きたる道路。英人の敷きたる鐵道。英人の張りたる電線。是れ印度諸民族の交通を便利にし、彼此相知らしめ、其感情思想を交換し、漸く其嫉妬を和らけ、其反對を緩るめ、大團結を化成する利器にあらずや。且つや印度人が英人に對する亡國の遺恨は自から國粹的精神を喚ひ起こし、國民的團

結の必要を感觸せしめ、漸くにして柔弱婦女子の多きベンガル人も、悍猛暴なるマトラッタ人も、山羊驅るカシムヤリの牧夫も、眞珠を漁ぐるマラバールの蠶人も、アフカン人も、莫臥兒人も、シクス人も、パルシ人も、ヒンヅ人も、錫蘭の島人も、婆羅門教徒も、佛教徒も、回回教徒も、拜月教徒も、拜蛇教徒も、拜牛教徒も、北は雪山山上より、南は須彌山下に到るまで、所在の人人は競ひ舉りて印度國民てふ大團結を作すへけん。看よ印度土人はベンガルに國民大會(National Congress)なるものを開設し、隱然猛然として國民團結獨立旨義を擴張布敷し、つつあるにあらずや。國民大會云云ハサーサムエル、ペーカー氏の紀事に據る。思ひ見る國民大會場裡、机上一滴の印度墨と、多感多恨なる數行の檄文は、他年革命獨立の大分子と生育すべきものなるを。

(第四) 英人漸く輕侮さる。英吉利と魯西亞との權力平均上の仇敵な

り英の強弱は魯の強弱と反比例をなすものなり。然り而して今や魯は東進して土耳其斯坦を略奪し、アムダリヤ、サードリヤの溪谷を所有し、メルザの水瓜畑をも蠶喰して、裏海海道は直ちに此處まで延張し、竟に英領印度の咽喉なるシハラバッドに迫らんとす。斯く魯人の強大となれり、即ち英人の権力は自から削瘦せられたるもの如し、即ち印度土人を、自から英人を輕侮するの念慮と發達せしめたるものなり。且つや英國がカンダバル（亞弗業斯坦）の戍兵を引き揚げたる、蘇丹の遠征を撤去したる、南亞弗利加トランスヴァールを伐ちて失敗したる等、悉く是れ印度土人が英人を輕侮するの源因となれり。印度土人が英人を輕侮するの結果如何、曰く英人を攻撃せんとするの種子を化成する是れなり。加之のみならず魯は銳意英國の權力を削瘦するを以て大主眼となすものなり。故に彼のルーマニヤ、セルヅ、井ヤ、モンテネグロを煽揚し

教唆し、以て土耳其反對し、自立せしめたる故、智を襲ひ、必らずや印度土人を煽揚し、教唆し、或は聲援して、英人に反對せしめ、其獨立の舉を庇補するとならん。之れを要するに、印度の獨立ハ早晚已むべからざるものにして、若し夫れ予輩が白頭霜鬚となりたる頃、兒孫をして新聞紙を膝下に朗讀せしめ、なば、其間必ずや印度獨立一舉の報告を聽取るとならん。印度果して獨立せば、我日本是に到りて如何。是れ亦今後予輩の講究すべき一大問題にあらずして何んぞ。

●第六章 臺灣論

我琉球の南海水一葦、潮汐相通じ、帆影未だ低迷せざる處、一大島あり。臺灣と云ふ。想ひ見る、檳榔樹葉婆娑たる邊、被髮赤脚の生蕃が聲を揚げ、水鎗を揮ひて、幾群の野猪を追逐し、時に或は海天墨の如き夜、沿岸に漂泊せる商船を暗襲して、其貨を掠め、其人を捕へ、石棍一撃、髑髏を碎きて生

血を啜り、舌を敲きて賞味せして、十五年前の事共と誰れか料らん、今日此處に於て、汽笛空に嘯き、鏡車煙を噴き、海底電線を張りて、世界と相消息し、石橋を架し、道路を開き、海灣を浚へ、埠頭を築き、幾多の工業其間に發達して、以て暗暗然我日本の爲めに斬新なる貿易販路を授與したらんとは、嗚呼誰れか這般の事業を成就するものぞ、太子少保福建臺灣巡撫一等男劉銘傳氏其人あり。

明治十七年、清佛の相交戦するや、劉銘傳氏は大軍に將として臺灣に派遣されき。佛國艦隊の基隆港臺灣の北岸に在る最要港なり。光緒十一年、版清人黃逢昶著はす處の臺灣生熟蕃紀事に曰く、本係鷓籠近時更易とを封鎖するふ當り、間間清人を屠り、無辜の婦女を殺害したり。而して劉將軍の佛虜を待するや、極めて敦厚豊かに衣食を支給し、且つ一人毎に金百弗を授與して歸營せしむ。佛人皆風采を想望す、其志す處固より近

少ならざるなり。尋で基隆淡水北岸に在り、亦要港なり。基隆を距るゝ遠からずの兩港に堡臺を築き、六十萬銀を捐て、アルムストロング後込砲を備へ、併せて無數のレミニントン、リト施條銃と、ガットリング砲を整へ、壯大なる火藥庫を設立し、且つ幾隻の巡洋艦を新造せしめ、或は同島所在の少年子弟をして洋語を習はしめ、或は在島の外國商人と交際し、或はラッセル商社に幾多の土地を賣與して烏龍茶を培植せしめ、米國陸軍義勇兵少將シエームス、ウカルスン氏の紀事に據る、或は盛んに西洋器械を利用して基隆地方の採煤事業を奨勵し、或は沿岸漕運の爲めに南通、北達、前美の三汽船を新造し、或は貿易事業視察として張鴻綠等の一行を南洋諸島に派遣し、或は臺灣と支那大陸沿海の重要な諸開港場及び新嘉坡、柴根との間に汽船航路を開通するの所見と具狀し、或は支那大陸との間に海底電線を張り、或は生蕃の逆首を擒にして悔罪歸化せし

め(光緒十五年四月一日發兌の「上海申報」に據る)或は在來の首城臺灣府の西南に僻在するを患へ、中部の市邑彰化府に遷都するの大策を計畫したり。而して其事業の最も顯著なるは基隆より起り、淡水、台北、彰化を経て臺灣府に到るの鐵道工事是れなり。予輩は劉將軍が臺灣鐵道起工の具狀書を讀む毎に未だ慨然たらずんばあらざるなり。書の通譯に曰く(禹城通誌下卷に據る)。

目下臺灣島は我國海防の要地として特に一省を分建するの始に當り宜しく殖産工業を盛大にし農工商賈を招徠して全島の繁榮富強を謀らざる可からず。而して其目的を達せんには内外運輸の道途を便利ならしむるを最大急務なり。是に南洋諸島商務視察として派遣したる委員、革職道臺張鴻銜、同候補知府李彤恩等既に本地に歸航し、新に漁船會社を創立し、新嘉坡、柴棍諸港を以て航通を始めたり。然れども緊要なる臺灣内地の運搬不便なるを以て山地に許多の産物あり。雖も港場に輸出する能はず。該委員等の云ふ所に據れば南洋各埠に於ける港國の出産人等は臺灣内地の肥沃なる如ふるに近來政府が

力を竭して招撫開墾せらるることを聞き臺灣に歸航して營業せんと願ふもの少し。させず然れども漸次滿地道路確今日の如くなれば人民を繁集し貿易を勃興せしむるを以て蓋し期し難かるべし(中略)故に本島に鐵道を布設し基隆に起りて臺南府に達せしめ各内地と港場の間を連絡せば獨り全島の商務に旺盛を加ふるのみならず海防に裨益する最も大なるべきを信す。以上の旨趣を以て商務委員等は尙ほ現今朝廷財政困難の秋なるに因り其工事費は一百萬兩の鐵道株券を發し之を民間に募集し該鐵道收入金を以て其元利を償還し少しも公金と動かせずして長程の鐵道を成就せんとを稟請せり。臣謂く臺灣は海外孤立の一島たるにも拘はらず實に南部諸島の屏蔽と爲す可き地方なれば動て殖産工業を振起し所有の利源を開拓して全島の經費は自ら之を供給し又南北の防兵は運轉節應自在なるにあらざれば永く威權を保ち一省の獨立を全くするを得ず。現に本島註防及請賦の事宜並に陸地海底諸電線架設工事に至るまで若々其歩を進め本年内外には次第に整頓を告ぐ可し。惟鐵道の事業に至りては臣深く其理を信して疑はず。雖も如何せん經費支出の途なきを以て遂に躊躇今日に及べり。今幸に該委員等の計畫あり其事業を舉げて悉皆民間の資本に依頼し官府は多少の保護を與ふるのみにして將來

坐して厚利を収得す可き方案なれば頗る賛成するに足る所なり又鐵道を本島に創設するに就きての利益は際邊開墾商業の諸事業の外目前の大利便三あり請ふ我皇太后皇上の爲に之を略陳せん

臺灣は四面皆な海にして背面山路を除くの外は偏處防守を置かざるべからず基隆滬尾安平旗後の四港には現に大砲を購入し砲臺を築造したりと雖も其餘新竹彰化地方一帶海口紛岐し守禦容易ならず若し一旦有事の日敵陸兵を派して猝然岸に登らば南北の聲援隔絶し全臺立こるに危急の勢を見すべし若し鐵道ありて兵隊の調發便易なれば敵兵不意に登岸する等の虞なかるべし是れ海防に利便ある一なり臺灣は既に一省と分置せられたるを以て中央省城を建設し南北各路を控制せざるべからず其省城を建築すべき彰化橋中路地方は前任巡撫岑毓英審かに察看を加へ臣亦前年九月に於て親く往見せしか其地勢平衍にして山を避し海を帯ひ省城を置くに最も適當なり然れども山地に近接し水路の便と缺くと以て省城官衙廟宇等の建造に付き材料の運輸に不利なるのみならず建省の役も商賈の來往する者意外に稀少ならんと恐る然るに鐵道開通するに至らば省城の商業繁昌を致すのみならず城垣官衙等の建築工事に與ふる便利と其材料運賃を減少するの利

益は如何そや是れ省城建設に利便ある二なり臺北より臺南に至る六百餘里(清里)の間に巨大なる溪溝三道あり春夏の際山水暴漲して故人の通を杜絶し大甲房裡の兩溪の如きは毎年必ず墜死するもの數十人あり故に牢固なる橋梁を架設するの議は目下に急迫せる一問題なり(中路)臣今各大小各溪上流の窄處に於て橋梁を架設せんを欲し其材料の費用を推算すれば銀三十萬兩に下らす然るに今該委員の鐵道布設の稟請を准許する時は此困難なる二十餘箇の橋梁は一齊に興造せられ姑く鐵道の利益を外にするも國家は先づ遂當り三十餘萬兩の費途を省くと得べし是れ臺灣工事に利便ある三なり(下略)

と聞く此鐵道の基隆より臺灣府に到るまで其間六百餘里(清里)基隆淡水間併に猫裡街大甲溪間も幾多の山嶺難所ありこれ開鑿せざるべからず鋼鍊軌條は一碼毎に三十六封度の重量あるものを用ひ沿道の橋梁は最も鞏固にすと然れば其資本金は一百萬兩(我百五十拾萬圓)と要するをにして内六拾萬兩を以て軌條機關車客車を歐洲に注文し年賦にて之れを支拂ふ約束なりと而して這般鐵道落成後は政府これを監督

し、民間の一會社これを經理し、收入運賃は政府九割を收めて資本金元利償還に充て、利息は年六厘となし、毎年支拂ひ、七年にして悉皆償還すと、會社は其餘の一割と乗客切符賣出金の一割とを收め、以て修繕及び營業の經費を充つる目途なりと、嗚呼何にや、意匠の雄大にして、經營の周到するや、眞箇に大國爲政家の風ありと云ふべき哉。

劉將軍の下に邵友濂氏あり、張叔和氏あり、皆濟々たる創業の才士にして、遭遇一代肺を裂き心を盡くして、將軍を輔佐翼賛せり、加之ならず彼の臺灣の陶朱公おして、山東の大飢饉を當り、兩回五十萬兩宛賑與し、清佛の役に當り、百萬兩を政府に獻納し、其功を以て破格にも内閣侍讀學士に擧げられたる林維源氏、三百餘年前より臺灣に移住せる唐人なりと、聖武記卷八に「嘉靖中海賊林道乾竄據臺灣」とあり、蓋し此人の後裔ふあらずやの如きも亦銳意して將軍の事業を周旋しつゝあり、或ハ

云ふ、福建物督張之洞氏の一書生より起り、忽ちにして今日の地位に進歩したる者なるを以て、自から膽放ち氣鋭く、劉將軍と合ふ處ありと、臺灣に於ける前途の事業想ふべし、獨り將軍の斯く銳意たるのみならず、清政府も亦た日本の征蕃佛軍の基隆封鎖後、遽然此島に注眼し、這般外部の大刺衝の幾多の感觸を彼國爲政家に授與したるものあり、想ふに基隆港若くは澎湖島、臺灣及び厦門の間に在る絶海中の島嶼なり、地圖上にハ鷓籠嶼と記せり、西洋人は Pescadores と呼ぶ、島中樹木無く又飲水絶少なり、然れども幾多の良港あり、艦隊と雖も泰々然として錨泊すべし、往古和蘭人これに據り、前年清佛の役に當り、佛國艦隊ハ此島を根本としたり、き艦隊を繋ぎ、鎮守府を創設するの必要なるてふこと、ハ必らずや彼の炯々たる李中堂の眼中に映り入りたらん、是れ亦た臺灣の全盛を誘來するものあらん、多忙なり、嗚呼多望なり、臺灣の今後、

劉將軍の臺灣の發達を促致する原動力なり。臺灣島裡の生産機關分配機關通信機關の實に將軍に因りて据へ付けられき。然ればにや同島の生産界は日お月お擴張するものゝ如く、輸入輸出の兩品より船舶の出入、船客の往來、海關稅も亦愈々増殖しつゝあり。今在福州なる我領事館の報告を審査參考し、淡水打狗(共に臺灣の要港なり)の兩港に於ける貨物の出入を明治廿年第四季(自十月至十二月)と廿一年全季とに相對照して表示せんが。

輸出

物	明治廿年第四季間	明治廿一年第四季間
石炭	二六八九噸	一〇、一七七噸
烏龍茶	二七四五七担	三七七五二担
硫磺	九五〇担	一七〇〇担
樟腦	一二個	一一〇三個
檳榔	三六六担	七六九担
其他密柑、糖等類	多少増加セリ	楠木板ハ少シク減退セリ

輸入

物	明治廿年第四季間	明治廿一年第四季間
石油	八七、七〇〇ガロン	一一五、八四〇ガロン
鉛塊	八三一担	一、八九九担
牛骨	二〇五担	六、七七八担
干魚	二七三担	一、二八八担
羊皮	四、四〇二枚	五、四七九枚
茶箱	二〇、九九一個	二七、三四〇個
米	三〇、四五四担	四、四九七担
其他鮑魚、ラマ打紐、麵粉、干蝦、木綿張、蠟燭、傘ハ増加		木綿反物、金巾、碧玉器、花生油、氷砂糖等ハ減退シメリト

又明治廿年第四季間ト廿一年全季間ニ於ケル船舶船客海關稅ヲ對照スルハ正ニ左ノ如シ

船隻	明治廿年第四季間	明治廿一年第四季間
船隻出入港	三一隻	四〇隻
船客(外國人)	二七人	三七人
船客(支那人)	二二七六八	三三九七人
海關稅	一二九、九四三兩	一五九、九四三兩

打狗港ノ部
輸出

物	明治廿一年第四季間	明治廿一年第四季間
干龍	一九九担	四四七担
干龍	五〇一担	六三三〇担
赤砂糖	七八六五担	三二四四担
龍眼肉ハ増加シ芋、楠木、姜黄等ハ減退ヲ示セリ		

輸入

物	明治廿一年第四季間	明治廿一年第四季間
寒冷紗	〇反	六〇〇反
木綿ハンケチ	三八ダース	六二ダース
木綿手拭	八五ダース	四三九ダース
棒鉄	一九八担	三四〇担
芋袋	五、〇〇〇個	二八〇二〇個
石油	〇担	三〇六担
豆類	一三三三四ガロン	六〇、八〇〇ガロン
其他毛布類、爆竹、麵粉、鉄鍋等、鉄ノモ増進ノ方ナリト雖モ金市類、腕飾用碧玉、金針、菜種、香水、干眼等ハ多少減セリ	一〇八三担	一五三担

既に然り臺灣の生産界は大速力を以て擴張しつゝあり其の我日本に及びず影響ハ如何曰く日本國裡なる或る部分の生産者ハ後世畏るべき競争者に遭遇したる其の一なり曰く日本の生産者ハ斬新なる販賣市場を發見したる其二なり。

何にをハ日本國裡なる或る部分の生産者ハ後世畏るべき競争者に遭遇したりと云ふ曰く臺灣基隆なる採炭事業の漸く全盛ならんとす即ち是れなり曰く劉將軍ハ臺灣所産の樟腦、硫黄、烏龍茶の輸出を周旋し日本所産の這般を壓倒せんとする即ち是れあり基隆の炭業に係る淡水税關長の所説に曰く、

昨二十一年初春の頃には基隆産の塊炭は一噸に付凡う二弗六拾仙位なりしが漳州抗夫の罷工其他の理由に依り大に基隆炭の需用を増加し爾來日に月に競争を始め内外の船舶續々として來り孰れも其積荷の不足を訴るが如き有様となりたるより概に相場も一弗方騰貴し政府管理の炭坑の如きは其坑

口に於て一噸三弗六拾仙の高價を以て賣却せり斯る盛況なりしを以て此の時同地石炭の供給をして常に充分ならしめたるには定めて莫大の利益を得んとならんに惜哉政府管理の殊田は僅々三ヶ所にして之より探出する石炭一日漸く七十噸位に過ぎざる故小船一隻の積荷を滿たすにも一週間の日子を要する様なる迂遠の仕掛たるを以て争て十分の利益を占め得るの理あらんや左れば政府に於て今同炭坑に若干の資本を投て其事業を大にし管理を嚴にするを得ば即ち清國歲入上の一源泉となるに至るべし云々

然るに頃日開く所に據れば同工務局長蓮氏は新たに自耳義國より技師を聘し全坑脈を實測せしめたりしに自後新開する炭坑より産出すべき石炭は凡そ百五十年の久しきに亘り其利益莫大のものなるべしとの見込を得たるに由り遂に臺南に赴きたる劉巡撫の歸府を待ち直に大工と興さん進目下類りに計畫中なり云ふ

劉將軍が臺灣産樟腦硫黄之奏に曰く、

(上略)樟腦一項近來日本産出甚多香港樟腦價日落如歸官辦每石可獲利二三元、台産每年約可出腦萬石硫黄台産最佳經前兩江督臣沈葆奏請開禁采備官用歷年辦有舊章每石成本洋一元官買每石價洋三元每年出產六七千石上等硫黄每年

只出千石均解歸官用其次積聚三千餘石官既不用商禁未開不能出口日久愈積愈多不獨糜費棄置可惜且香港年銷硫黄至萬餘石運至江南天津一帶薰炙焚屬草帽蒸炊餅々製造爆竹銷路實甚廣台灣礦甚佳奸民私煮販運出口不一而足以自採之礦禁不出口既應日本暢銷又不能禁止奸民私煮若設法經理雖獲利無多於撫番經費不無小補等情前來臣查台灣樟腦硫黄兩項民間私煮私售每多械爭滋事隨官收買出售發給執照出口就目前情形而論每年可獲利三萬餘元以後若能出產多銷路暢經理得人日漸推廣以自有之財供無窮之用實於國計民生兩有裨益(下略)

と又將軍は力めて烏龍茶の培植を奨勵せり米國陸軍少將ウヰルズン氏曰く臺灣なる烏龍茶は亞米利加の市場に於て早晩日本茶を壓倒すべしと是れ誠に日本の當業者が輕々看過すべからざるものあり予輩苟んぞ臺灣の時事を冷然たるを得んや嗚呼是れ豈に對岸の火災ならんや

何にをか日本の生産者が斬新なる販賣市場を發見したりと曰ふ曰く

劉將軍が銳意臺灣日本間の交通を濃厚にせんとする即ち是れなり曰く日本貿易品の漸然臺灣の市場に好況を呈出する即ち是れなり聞説らく將軍は島裡に日本語學校を創設せんとす是れ豈に此彼の交通を濃厚に有無相貿易せんとするの遠圖にあらずして何んぞ而して復た日本貿易品の漸然臺灣の市場に好況を呈出する現象を表示せんか

日本摺附木(淡水港へ輸入セシモノ)

明治十八年第四季間	五六九五グロス
全 十九年第四季間	一一〇五〇グロス
全 二十年第四季間	一五、八五〇グロス
全 廿一年第四季間	二五、七二六グロス
日本木綿織物類(打狗港へ輸入セシモノ)	
明治十八年第四季間	一四一九反
全 十九年第四季間	二三五反
全 二十年第四季間	二〇〇八反
全 廿一年第四季間	二二四一反

在福州なる日本領事は日本木綿の臺灣地方の實用に適應する事實を報告して曰く

本邦綿布の臺灣地方に追々輸入を始めし事は屢々報告せし處茲に昨明治二十一年中臺灣の一府へ輸入せし日本綿布の良數を調査すれば七千四百〇二疋にして之を一昨廿年分の五千九百四十二疋に比すれば一千四百六十疋の増額にて固より未だ之を以て十分の貿易品とは申され難しと雖も抑も本邦綿布の臺灣府へ輸入を始めたるは凡明治十九年頃にして爾來引續き内地の需用も増加せしことなれば此の先き尙幾許の増進を見るや實に計られざれども臺灣地方の人民に取ては却て安き外國製の金巾よりは直段は高くとも寧ろ本邦綿布の方が實用に適する事の事にて而して其用途は重に労働社會の頭巾及び腰帶等を製するものなり臺灣府城は各輸入綿布類の中央倉庫とも稱すべく且つ需用の最も重なる場所にして其次は嘉義、彰化、恒春等の諸縣なり是れ以て僅々の距離に過ぎざれば都て荷物等を内地の市場に運搬するに一々人足の力に依らざるを得ず聞く處に依れば此人足費は百里毎に一荷

生物誌

に付銀一千百文づゝなりと故に其荷物の内地に達せしときは隨て價格も非常に騰貴し爲めに實社會の需用にハ適せざるなれども一旦台灣府城に鐵道の聯絡を通し之れ等の諸縣へ運搬の道開くるに至ては今日迄未だ内地人民に知られざる外國諸物貨も將來益々進入の便を得るならんとの説なり云々
ウヰルソン氏又曰く米國製の洋燈、釘、金物類等皆臺灣に販路を發見すべしと予輩は斷信す、日本製の這般も亦其價廉なれば品質に於て精良なりせば必ずや臺灣に需用されんといふ然れども予輩の斷信する處ハ獨り之に止らず臺灣所産の結糖と帆走船にて輸入し我國にてこれを白糖に製糖するも亦是れなりとす
多謝す彼の麗人よ(西洋人の臺灣をFormosaと呼ぶ、西班牙語にて麗麗てふ義なり)卿は粧と疑らば黛を拂ひて日本好男兒の一顧を待てり予輩豈に船を春潮に棹して卿を瀛洲(黃曉墀臺灣竹枝の第一に曰く鼇頭砥柱梗中流千里臺疆水上浮滄海雲濤環四面我來疑即是瀛洲)とに訪ひと

四洲はカハル FORT MOSA と云ふ 麗麗なる西語
は Hermosa と云ふ 麗麗なる西語
工ルモナ
愛可なり公所疑はし尙にはあらず

らん卿幸に笑を含みて岸上に迎へんか。而して予輩先づ卿卿に贈るに紅豆と以てせば卿卿も亦酬ふるに寶匣を以てせんとす。麗麗なる哉日本的好男兒よ。測るふ臺灣島は我が長崎の西南、鹿兒島の西西南、各八百五十海里にあり。若し夫れ帆走船にして順風を孕みたらんには四十八時間にして基隆港に到るべけん。琉球那覇港の西微南四百五十里に過ぎざれば僅かに二十五時間にして輒ち達すべけん。而して往途には鹿兒島藩の所謂「流し」の航法の如く、潮に隨ひ汐を趁ふて駛走し、力めて黒潮の流域を避け、臺灣の往途には西南方に針を取るものなり。而して黒潮は一時間三里許の速力を以つて、船の方針と正反對即ち東北を指して快走す。故に力めて黒潮の流域を避けざるべからず。夏期にハ其初め東南風を利用して西航し、尋て北緯二十四五度より東北貿易風を利用され得べし。貿易風の區域に入れば風位甚だ變更せず、毎に一定の方向

一定の速力にて吹き來るを以て、隨て水手の勞を用ひ力を要するを、甚だしく、且つ危険の憂慮特ふ稀れなりとす。冬期に先づ西北風を利用して南行し、尋で東北貿易風を利用すべし。而して又遠途に力めて、黒潮の流域中に入り、之に順ひ之を趁へば知らず、日本に歸着すべけん。要するに日本臺灣間の航路は蓋し難艱ならざるの學理上に徴して昭々たらん。

想ふに我鎮西の地脈奔りて薩摩に止り、折れて近洋に入り、琉球群島を經、忽ち臺灣に到りて觸起したるものなり。眞個に臺灣の地勢の宛然我が版圖中に在り、然ればにや予輩が祖先は此島を「高砂」と呼ひき、足利氏の末世、我が西海所在なる不逞の徒、冒險者は相黨を作し、此島を以て本據となし、明に入り、江南を侵掠したり。當時彼等の臺灣を「日本甲螺」と改稱せり。甲螺カクといふは、かしら、即ち頭、即ち日本の起首キソウと云ふ義なり。嗚呼、日本

の起首キソウ、日本の起首キソウ、これ猶ほ近時獨逸人が赤道直下なるニューギニア大島の北部を經略して、皇帝維廉カインリッヒと改稱し、アドミラリチー、ニューブリテンの諸群島を占領して、ピスマルク群島と改稱したるが如きもの、意氣千秋誠に人をして曠世の感あらしむ。彼の農装して臺灣なる和蘭人の城堡ホルト、ジールンデヤを倏襲し、咆哮奮前して、甲比丹を生擒し、質子を取り、貨財を獻せしめたる濱田彌兵衛、今何の處にか在る。彼の國破れ、宗廟亡ぶも、孤忠二十年、猶永曆の年號を用ひ、絶代の俠骨を、蜚烟燧風の間、に埋却したる我平戸の寧馨兒、鄭大木、今何の處にか在る。彼の日本兵の牡丹族を軍門に歸降せしめたる報告に接し、請見皇威及殊域、石門頭上、旭旗風と大書したる大久保甲東、今何の處にか在る。嗚呼、我が日本が當年臺灣を占領せざりしは、是れ終天の恨事なり。然れども、其貿易の買權、未だ他の手に落ちざる處、語を寄す日本の好男兒、汝が日本國裡

の紛々たる小内治少時事に周旋する勢力を以て何そ之を大外に利用せざる汝壯士よ汝浪人よ而して予輩が大聲疾呼する處は獨りこれに止らず我國人が先づ抵抗力の最少なる箇處と利益の最多なる箇處とを參酌商量し而して後この箇處に染手する即ち是なり我が有爲敢爲なる新商人よ請ふ汝が歐洲に注ぐ處の炯々たる眼光を濠太利に轉せんか桑港に注ぐ處を瓦港に轉せんか暹羅に注ぐ處を印度に轉せんか漢陽府に注ぐ處を重慶府に轉せんかマニラ(フキリピン)群島に注ぐ處を臺灣に轉せんか是れ予輩の斷々として獎望するものなり予輩は此處に及びて日本の公衆并に當局者に切言するに我日本と臺灣の關係を著々密接にするの方策を計畫せんを以てするものなり而して其第一着の方策に一箇の名譽領事を基隆港に置くべけん臺灣在島二百六十の外國人中若くはラッセル商社旗昌洋行支部(米人より組

織す)の吏員中豈に一箇の我名譽領事を囑托すべき者は是れ無しとせんや予輩は多謝す我政府は業既に濠洲メルボルン府に書記生を任命したりきマニラ瓦港に各領事を任命したりき而して今後任命すべきもの臺灣基隆の名譽領事にあらざりて將た何んぞ

◎第七章 支那外なる第二の上海

佛人安南を取り銅柱に銘し紅河(Sana Koi)瀾瀾江(Mekong or Cambodia River)の兩溪谷を經略し勝さに支那南部と内陸貿易の衝路を開通せんとす英人豈に勃勃然たらざらんや是に於てか故さらしに師を起こし(伊蘇布物語の狼と小羊)の譚の如き理由を以つて魏然一軍緬甸に入り阿瓦(Ava)の舊都馬赫拉(Mandaley)の新京を陥れ國王を擒ふして逆境の間に遠颯(當時の情況)白樂天が長歌行中なる漁陽鼙鼓動地來驚破霓裳羽衣曲の二句を以て全班を蔽ふべし英領緬甸と緬甸本國との境界線

は敢へなくも抹殺されて、彼の東接眞臘西接東天竺西南墮和羅南屬海
 北南詔地長三千里廣五千里東北袤長屬羊苴咩城凡屬國十八とさしも
 に繁華全盛を極盡せし驃の朝廷も異境異種の民人が掌中に入りぬ。嗚
 呼此れを明治十八年十一月の事となす。
 緬甸の全部の英人の掌中に入りたり。英人は數理的の人民なり、通商貿
 易の人民なり、加之ならず、彼等が緬甸を征服したるハ、佛人が安南を征
 服したる返照なり。佛人が支那南部と内陸貿易の衝路を開通するの企
 圖を先づ制せんとするを以てなり。彼等豈躊躇せんや。是に於て大金
 沙江 (Irawady River) 清人の怒江とも稱へ、又直譯して依拉攏底河となす
 を沿ひトングに到る一百七十哩の既成鐵道を延長し、馬德林より新街
 (Bhamo) の間稻花黃雲を吐き、綿絮白雪を吹き、麻栗樹翠にして滴れんと
 せる處を貫通し、夫れより一ハ西北に折れて阿薩密 (Assam) 清人の亞山

とも稱へりに入り、印度鐵道の計畫線と相連絡し、一は暹羅王國の西北
 部に到り、シムメ (Ximne) に到り、此處より一線は南伸して盤谷府に達し、
 一線は支那の西南境なる雲南省普洱府 (Pocui) の思芽廳 (Schow) に走ら
 しめんとす。而して英人は業既に大金沙江の右岸ブローム府に到る一
 百七十哩の鐵道線をも敷き了り、且つヤトング、馬德禮の間は兩極より
 工事に着手したりきと、眞個に曠世の事業なる哉。
 予輩ハ緬甸鐵道の遂に成就すべきとなるを確信す。何ふと以てか確信
 する。曰く英人即ちチウトニック民族の事業なるを以てなり。彼れチウト
 ニック民族の意匠ハ雄大なり、然れども緻密あり、冒險流なり、然れども考
 實なり、其計畫の如きハ深夜沈々たる間に千思萬考し、東天將さふ白か
 らんとするや、他人に先ち立どころにして着手し、崎嶇間關、竟に能く其
 志す處を果たす。緬甸鐵道にして此民族の手に着けらる、豈に成就せざ

らんや世人若し英人が善意の深遠あるを怪疑するものあらば請ふ郭嵩焘氏が倫敦駐在の清國公使たりし際季中堂に上りたる書と閱了せんか。

去冬上海ヲ經格致書院ニ於テ一幅火輪車道圖ヲ見ルニ印度ヨリ直チニ雲南ニ通シ一ハ臨安ニ出テ東シ廣州ニ趨キ一ハ楚雄ニ出テ北シ四川ニ趨キ折テ漢口ニ達ス一ハ廣州ヨリ嶺ニ循ヒ湖南ニ出テ漢口ニ會ス又乃チ南京ヨリ鎮江ニ至リテ東シ上海ニ出テ一折テ寧波ニ出テ以テ京師ニ達ス之ヲ見テ怪作ス念フ雲南南メテ通商シ即チ火輪車路ニ籌及スルナリ倫敦ニ來ルニ及ビ此圖ヲ得ル已ニ十餘年前ヨリ出ルナリ蓋シ西人蓄意ノ深キ至ラザルナキナリ印度ノ火輪車機カニ阿薩密ニ及ビ中國ニ通スルヤ山南山北兩道ヲ分チ北道ハ阿薩密ヨリ直チニ依拉薩底河ニ抵リ南道ハ緬甸ヲ繞出シ折レテ東北シ依拉薩底河ニ會シテ以テ雙九ニ達ス豫算此ノ如シ凡一二年ノ後兩處鐵道必ス興修スル者トス

と然リシヨシブル如何んぞ中止すべけん其の眼中豈に亞細亞あらんや。嗚呼嗚呼緬甸鐵道の結果何事ぞ緬甸内地の土産も暹羅國裡の物品も

阿薩密所在の石鹽石油石炭も雲南省中の金銀銅鐵水銀も二千餘萬の人口を保有せるてふ四川一省の諸貨物も天然無量の利源を未だ開發せざるてふ貴州地方の蓄藏も北ハ温帶中より南ハ熱帶裡の物物産産ハ這般鐵道に頼リ大金沙江の溪谷と南下して其江口に輻輳すべけん大金沙江口の傍に港頭ありラングーン(Rangoon)と云ふ海を距ること二十七哩江水注々として幾多の大艦巨舶を錨泊せしむべくセンキールポイントの突角は風波を遮斷すべく其所在は坦平おいて百萬の戸屋を建造するに足れり是れ豈お竟に第二の上海たらざらんや。後印度所在なる歐洲各國の殖民地にして今後ラングーンと能く競争し得るものを佛領の柴棍港となす然れども予輩は柴棍が竟にラングーンの競争者たる能はざるものなる筈を確信す何れを以てか確信する曰く羅甸民族の殖民地あるを以てなり想ふに羅甸民族の小説的な

り、戲曲的なり、通商貿易の如きは其最短處なり。チートニック民族の最長處は羅甸民族の最短處あり。自己の最短處と以て他人の最長處を相競争せんとす、是れ如何んぞ能くすべけんや。柴棍の佛領なり、羅甸民族の殖民地なり、ラングーの英領なり、チートニック民族の殖民地あり。柴棍の竟にラングーに數歩を譲與する豫言すべきなり。況んや柴棍と支那境界線との距離ハ、ラングーとの距離ハ二倍するをや。嗚呼、ラングーハ今後にして必らず後印度所在なる歐洲各國の諸殖民地に弱たるべけん。

料るハ中央亞細亞なる英魯の鐵道線が相連絡するも、今より數年に出でず、緬甸鐵道の落成も亦今より數年を出でざらんとす。悟了せよ、日本支那の旅客は暹羅國都なる盤谷府若くはラングーに上陸せば、汽笛一聲、鐵車夢を載せて、輒ち歐洲の諸大都に到るべきとを、日本の貨物も

亦○這○般○鐵○道○に○頼○り○て○以○て○直○接○に○前○後○の○兩○印○度○中○央○亞○細○亞○に○運○搬○さ○れ○得○べき○と○を○日○本○の○水○産○物○も○亦○頼○り○て○以○て○支○那○の○西○南○部○に○入○り○込○み○得○べき○と○を○語○を○寄○す○浦○潮○斯○德○に○注○目○し○西○比○利○亞○鐵○道○工○事○を○喃○喃○す○る○人○士○よ○請○ふ○轉○一○轉○し○て○ラ○ン○グ○ー○港○に○注○目○し○緬○甸○鐵○道○工○事○を○喃○喃○せ○よ○嗚○呼○緬○甸○鐵○道○チ○ー○ト○ニ○ック○民○族○の○鐵○道○ラ○ン○グ○ー○港○第○二○の○上○海○宜○し○く○予○輩○の○腦○裡○に○鑄○銘○す○べき○哉○

◎放吟

高言漫稱要濟時、滿腹經綸欲寫誰、萍跡十年都附夢、杞憂百載獨勞思、紅顏
 閨秀少佳偶、青衿書生太數奇、一咲聞吾歌激矣、虛名既畧黨人碑、
 埋骨路傍聊自期、高言豈謂在濟時、半生事業君休咲、唯有風杉雨笠知、
 南球之月北溟天、回首曾遊跡似煙、豪氣如今都蕩盡、閉門獨草憫農篇、
 投筆向空憐我迂、十年心血仕長吁、看來身世悠悠事、笑畧江湖一腐儒、

南洋時事附錄終

南洋時事附錄終

○初版南洋時事諸新聞批評

◎朝野新聞社説

(明治二十年五月二十四日、二十五日)

南洋時事を讀む 著書の世に出するの多き古來未だ今日の如く盛んなるは知らずと雖も概ね皆蕪雜粗笨にして大方讀者の一樂と博するに足らず間々文章の道勁奇拔なるものなきに非ずと雖も其着眼する所の趣意之と叙述する所以の意匠とは則ち拙劣の誹と免かれず時に或は着眼高くして意匠に富める者なきに非ずと雖も其文字章句は即小兒夜半の囁語に異ならず意匠文章共に優美にして且つ着眼の高尙なる者に至つては吾輩常に其少なきを憾めり頃日志賀重昂氏著はす所の南洋時事を讀むに及んで少しく平生の遺憾を慰むるを得たり南洋時事は僅々二百頁の小冊子に過ぎずと雖も其慷慨悲歌、燕趙壯士の口吻に似たる所あり山を寫し水を需くの情致優美なる古人の游記文に似たる所あり其世態の變遷を説く所は即ち歴史家の筆の如く其地理の遠近交通の便否を説く所は即ち地學者の筆の如く其實を擧げて將來の趨勢を説く所は統計家經濟家の筆の如し一片の小冊子にして詩歌あり議論あり叙事あり小説あり筆路縱横にして意匠の繁錯なるも南洋時事の如きは世間多くあらざるの新著なるべし若し夫れ各科を分離して一々其優秀を調査せば世間慷慨の士は之れに超過するの慷慨談を爲すべく詩文専門家は之れに超過するの名詩妙文を作るべく經濟家は之れに優過するの經濟論を爲すべく其他歴史家小説家地學者の如きは亦た各々一端の長所を以て著者と壓倒すべしと雖も多端の筆路を取捨して之れを僅々二百頁に過ぎざる小冊子に包括したると南洋時事の如きは吾輩の多く見ざる所なり故に讀者の眼界常に變轉して毫も倦むと知らず唯だ卷冊の終り易きを憂ふ是れ豈に近來續々梓に上る所の雜書と同く故紙堆裡に埋没すべき者ならんや然りと雖も吾輩の此書を賞するは唯だ運筆自在にして思想多端なるが爲のみに非ず其價值遠く之れに超過する所のもの在于存するが爲めなり其者果して如何曰く著者の爛眼早くも南洋諸島に及び其政治上經濟上及び貿易上の利

害は大に我が日本の利害に關係あることを看破し躬自ら之に渡航し望遠鏡雨の間に諸島の形勢を觀察考察したることは是れなり

夫れ乾陸の南太平洋に在る者極めて多く方に歐洲諸國の食糧奪奪する所となり土人の運命は晨にして夕を計るべからずと雖も歐洲諸國の開拓せる殖民地は日將月就遠からずして南半球に富強文明の新世界を現出せんとするの勢ひあり而して我が日本の南洋諸島を距るもの遠からざるや利害の關係は極めて大にして且つ極めて近し然るに世の貿易策を講ずる者動もすれば此の好隣國を度外視して苟も巨大なる利害の關係あることを知らず適ま之を知る者あるも尙ほ南洋諸島等を閑視して調査報告の勢を執れる者なし今著者の如きは實に世人の度外視する所を度外視せずして重大なる利害のあることを看破したるのみならず亦た幾多の艱難を辭せずして蕪然赤道直下を横ぎり躬自ら諸島の間に遊んで之れが形勢を查察し以て一部の好書と著せり其著眼の後抜なる設令字句文章の觀るに足る者なからしむるも就尙ほ讀者の少なきを憂へざるべし況んや筆路縱横にして意匠亦た多端優美なるをや(以下は本書の意見、論文、統計等の抄出なれば略之)

◎報知新聞

南洋時事 志賀重昂氏の著にして丸善より發兌す此書は著者が南洋を巡遊して親しく實地に就き見聞に觸れし事の荷も工業上殖産上に於て我邦に關し及び南洋大勢に關する事柄は記して漏すなく論して盡きざるなき一部の南洋大勢論と云ふを得べく貨殖篇とも云ふべき書なり書中間々著者が經歷の際に得し快活なる時と載せたり

◎毎日新聞

南洋時事 志賀重昂氏の著なり之を讀むに南洋群島の地理を説く所は明細なる地圖を見るの思ひあり其山水風

物を序する所は吾人の實景を撰寫したるが如きの妙あり而して之を貫くに慷慨悲憤の精神を以てしたる者なれば讀む者として好風明月の間を逍遙しながら南洋の地理人情風俗を知らしむるの良書なり

◎國民之友

南洋時事 南洋時事は南洋近來の出來事と説き併て我が日本が南洋諸島に向て將來關涉せざる可らざるの問題に論及したるものなり其の議論に所謂保護政略の勸業主義と含有する如きは少しく我人の敬服する能はざる所なれども「予輩は兼併主義を懷抱するものにあらず殖民政略を唱道するものに非らず唯海外到る處に我同胞の移住散在して商業を營み農事に服せんとを獎勵するものあり海外到る處に大和民族が茁然たる温顔を見んとを冀望するものなり海外到る處に商業的の新日本を創造せんとを希願するもの也」と云ふが如きは恰も我が心を得たるものなり且つ文章は一種の趣味ありて斬新にして面白し而して卷中驚くに堪へたるは數多の詩と挿入たるを是れなり此の一點よりすれば題號を改めて南洋新詩と云ふも蓋し不可なかるべし要するに此れ氏が詞藻に富たるの故を以て即ち長袖善く舞ひ多錢善く買ふの類ならん就中「横濱好觀船頭月、他年豫期照我屍、壯句吟破南極雪、蛟龍舞兮鯨鰲起」の長篇の如きは尤も秀逸なるを覺ふ

◎時事新報

南洋時事 時事新報の讀者は記憶すべし昨年の今頃農學士志賀重昂氏が日本帝國軍艦筑波號に乗リ組んで南洋諸方を巡遊したる其遊紀を本紙上に掲載したりしと其文辭の流麗にして事と紀するに極めて鮮活特に立意確當にして尋常の紀行文とは玉璞の相違ありたるも當時讀む人一般の汎評なりしか氏は總て隨朝の後其歷遊の坤輿を基礎にして實蹟の事實を用材にして新たに經營を加へたるものは南洋時事なる一部の經驗策となりて今や其礎築と

空ふしたり堂に上り室に入て先づ仔細に點檢するに南方の好隣國、日本濠洲貿易の針路を脱き夫より「マナイ」運轉して平三角の漸と應用して海洋航運の緩急に脱き及ぼし或ハ日本布哇兩國の關係就中布哇の砂糖業と日本大島沖繩諸島の製糖業と比較して將來の成行を豫占したる所は最も著者の用意と視るに足るべし篇中間々慷慨激昂の議論を交わたるは寧ろ客氣にして載する所快活の詩も亦其餘緒ならん之を以て全篇を蔽ふべきに非ず日本が南洋諸洲に對する經濟策政治策を論ずるの書今に於て外に有る無し故に南洋の貿易に志す人は勿論荷も海外の形狀と知らんを欲せば一部の南洋時事は購讀を省むべからず一冊の定價は五十五錢にして通三丁目の丸善より發兌也

◎函館新聞

南洋時事 札幌農學校出身の學士に一才子あり文藝と嗜よく之に長せりとの評は曾て記者の耳よしたる所なりき爾後子の所在に就て傳聞せざりしがまきに時事新報紙上に就て忽ち氏の名と發見し其濠洲の紀行數篇と登載せしものと見たり文氣豪宕筆論雄偉一讀人意を快ふしたりしが頃又南洋時事一巻と著したりとて其一冊と寄贈し批評を乞はれたり一冊二百ページ餘の中冊子にて其一班は已に時事新報紙上に於て觀ひたる所なり同々東西の詩句を引き自作の詩と挿む杯氏の花ある筆は此實用實利の議論と一層激烈ならしめ睡眠と拭ふの思ひあり殊に北海道開拓策をも對照したるミシコラ大に吾人の參考すべき條多しとす兎に角南洋の事情に就て吾人が智識を開きしは此書の賜と云ふの外なし

◎北海新聞

南洋時事 歐米の大勢と論ずるの書汗牛充棟皆ならず獨り南洋諸島の記事形勢と説くものに至つては絶て無くし

て稀れに見るの所なり而して今や南洋諸島の實況を大勢を詳述して漏らさざるものを見るに至れり南洋時事はれなり著者は札幌農學校出身の學士志賀重昂氏にして文字精確慷慨の氣紙面に淋漓たり殊に北海道を以て新西開に比較せし條に至つては大ニ世人の注意を促すものあり南洋の大勢と知らんを欲するものい須く坐右に一本を置くべきものなり

◎金城新報

南洋時事 志賀重昂氏著南洋時事一冊と寄贈されたり氏は本縣出身の人にして當時東京に寄留し客年海軍省の特許を得て軍艦筑波號に搭乘し南洋諸島の間に往來して親しく諸島の實況を目撃し大に我日本前途の大勢に注目する處ありしが遂に南洋時事一巻と著して我國人が南洋諸島に注目するの急務を喚起するに至れり今其言に曰く我日本大洋中離群獨居して陽に南洋諸島と控へ又近く濠洲に接す焉ぞ知らん南洋の鯨鱈は所在を震盪し其餘波は疾く馳來りて富士山麓に憂摩せん」と云々又曰く前途と豫想すれば尙に將來我國の物産を販賣すべき一大市場なり云々亦以て氏が活眼遠く我日本前途の大勢を看破するを知るべし願ふに我國人が眼界の少なる一度び眼を西に注げば又た南北あるを知らず近來少しく魯領の如き北方に眼を注く者あれど未だ南方諸島に眼を放つものなし獨り志賀氏軍艦に搭乘して南洋諸島の政治經濟を目撃し以て我國人の注意を喚起せん」とす余輩は他日南洋諸島へ我貿易船の往來する前に當りて此書の出るあるは將に以て米洲大陸と發見するの前に木葉の漂着するを認めたるを同一の名譽を以てするも決して其過評にあらざるを信するものなり

◎讀賣新聞

南洋時事 本書は志賀重昂氏の著にして該書は同氏が嘗て南洋に航海中我國の將來に關して實見せんことを述べ

られたるものにて快筆満々覺ます人として南洋中此佳境あると知らしむ實に我國の貿易上には必用の書と云ふも敢て溢美にあらざるべし然れども之と言ふ難きにあらす之れと行ふ是難しとの古言もあれば唯其實地に行はれしめん事ふる望ましけれ

◎朝野新聞

南洋時事 將來我が日本商人の努めて商路を開くべきの地は濠洲を始め南洋の諸島に在りとは實地に老けたる活眼者の先見なり然るに我國と左まで遠からざる南洋の事情に通ずる者は我國の商人否商人のみならず學士と雖も之れを知る者少なし今此書の發兌あるに逢ふて便利を得る者必らず少からざるべし本書は志賀重昂氏が實地を踏みて其目撃する所を記したるものにして丸善書物店の發兌なり

◎改進黨新聞

南洋時事 該書は日本の廣告にもある如く志賀重昂氏が嘗て南洋に航海中我邦の將來に關して實見せし事と述べたるものにて我邦貿易上には必用の書なりと信す

◎めづる新聞

南洋時事 此頃通三丁目丸善書店より發兌しれる南洋時事は志賀重昂氏の新著にして其緒言に依るに我が學者士君子が南洋の事情と度外視するが如き觀あるを慨嘆して者はされたるもの、如し而して其書僅かに一綴二百ページの冊子なり雖も近來我邦が通商の路開けたる濠洲の如き又は我が同胞二千人が出發せる布哇の如きを始めとも所謂南洋に於けるの事情を詳記し附するに自家の意見と以てしたるものにして近來流行せる著書と其撰と殊

に才蓋し氏は從來南洋貿易の熱心家にして本書記事の如きも多くは客年海軍省の特許を得て我が軍艦の南洋を巡航するに乘組み實際に討究し得たるものなりと云ふ

◎通俗學藝誌林

南洋時事 志賀重昂氏の南洋時事は丸善より發兌し弊社へも一本を寄せられたり世の學士の多く洋の外に航し政治法律理科何々等百般の學問技術其他の事に就て歸國の後世を益せらるゝ出版ものも少なからざれども此書の如きは其中にも最たるもの、如く我々は誠に其土産の滋養の功驗多きのみならず香味の佳絶なるは實に書物否食箸と下に置くを忘るゝはかりなり洋行歸りの諸君には何卒いづれも此の如き御土産と頂戴いたしたきものなり指問に金玉の戒指を光らし襟邊に黄金の時計を輝かしながら頭腦は蟬の脱殻の如き様にて御歸國あるは我々一向感服仕らざるなり

◎詩文詳解

雨窓閑話 大 江 敬 香 述
余去歲時事新報紙上に於て志賀重昂君の寄送に係る南洋記行を讀み其文章の簡明なる其記事の巧妙なる其精神の活潑なるに服し新報の其の紀行を採録するを見る毎に之を讀むを以て自ら樂みき爲せり君の歸朝あるや未だ日ならずして南洋時事の著あり乃ち購ふて之を見るに文章暢明意見新警之に加ふるに詩賦を以てす皆唐詩の遺韵あり蓋し多く後羅きの述作なり而しては余未だ君を識らざるなり
去月某日偶少閑を得即ち君と其の家に訪ふ君時に家に在り談話數刻初君余を以て一の「ホーエト」を見做せしが余の南洋時事上其の要點を説きしより余の「ホーエト」には非らずして英學社會の一人なることを知り更に一層の快と

添へたり君は参河開崎の入幼時父と養ひ給や長するに及んで京に來り始め攻玉塾に在り後札幌農學校に入り苦學四年竟に農學士の學位を得善く英書と讀み巧に英詩と草し餘力漢籍と修め漢詩と作る蓋し多く獲維きの才俊也其の南洋に航遊する已に其の着目の異なるを見るも雖も是れ別題に屬すれば余は爰に詩學上君に服する所以と述へ併せて江湖才大に警戒するところあらんを欲するなり

抑も君の南洋に航するや濠洲、濠洲、新西蘭（濠洲大陸より壹千貳百英里と隔て北中南の三島より成り南緯三拾四度より四拾八度東經百六拾六度より百七拾九度）の間に位し我が東京海と距る直徑凡そ五千五百英里の處に在り「フヰンツ」「サモア」「布哇」我が東隣の獨立國にして我人民の彼島に航行し糖業に従ふもの二千ありとの間に遊し境に觸れ感を生ずるや筆と採りて詩を賦す（本集載する所は其の一斑なり）其詩風調高雅致て離索を其の間に用ひず自ら古詩人の遺意を得たり蓋し故なくして詩と作るは詩の本旨に非らず詩の本旨に協はざるものは平仄と誤らず古典と運用すも雖も余は決して詩と以て之と目せざるなり詩の本旨は言志の二字に止まり他に及はずものに非ず君の詩流暢則に古典を用ひず直に見る所と寫す是れ真境新詩。人として吟じて倦まざらしむる所以なり愁心一夜晴潮聲、の句の如き珊瑚礁上白鷗鳴の句の如き實に身其の境に非ざるより決して得可からず又何來孤鶯拂雲起皎月影高南半球の十四字と云ひ秋深椰樹花如雪埋却英雄未死魂の十四字と云ひ恐らくは前人の未だ道破せざる處なる可し何そや賤人の未だ曾て此境と經たるものあらざればなり南半球の月。哥克の魂。君の詩の爲に其の絶景と想ひしめ其の幽獨と慰せしめたるものに非ずや

君の南洋時事中に日本貿易家の参考に供すべきものありと題せる一項あり是れ獨り貿易家の参考に止まるのみに非ず今の詩人は最も爰に着眼せざる可からざるものなり即ち之を抄出す（以下は本著論文の抄出なれば略之）

◎東京經濟雜誌

南洋時事 南洋時事は農學士志賀重昂氏の著なり氏は昨年軍艦筑波號に便乘して南洋諸島を歴遊し其親しく見る所に感下聞く所に激し胸中鬱勃たるの思想乃ち溢れて此冊子と成せし者なり故に此書や之を概評すれば紀行文に實くに慷慨悲壯の精神を以てし感の極まる所即ち之を詩想に漏らせり是れ此書の紀行文にして紀行文に非ず經綸論にして經綸論なるに非ず詩集にして詩集に非ざる所以なり其南洋諸島の形勢と論じて濠洲大陸及び諸島の來歴現狀を説き「メナマ」地峽の開墾が南洋貿易及東洋貿易に與ふる影響と論じて將來日本が東洋貿易の中心市場たるが如く新西蘭は必らず南洋貿易の中心市場たる可しとて此二島事情と同ふするの點と列舉せるが如き吾輩は其注意の點にして説明の周密なるを喜ぶ者也殊に日本立國の根本は貿易製造にありと爲し濠洲は將來億萬の「アングロ、サキソン」人種を載す可き最大市場なるを説き南北半球季候相反し日本の夏は濠洲の冬なれば互に其の時候後れの餘り産物と貿易するを得べしと論じ其他二地間通商の利益多きを掲げたるが如きは商人の一讀せざる可らざる書なり其他布哇殖民の有様と論じ顧みて我北海道の開拓及大島沖繩諸島の製糖業と論するが如き筆鋒南東二洋の間に馳せ又讀者として倦む能はざらしむ唯者は南洋土人の零落と見ては白哲人種の堅忍勇斷に切齒し日本の及ばざると思ひては黃色人種の前途に扼腕し不知不識保護主義の爲めに憂はるる所なりしは最も惜むべし

◎出版月評

南洋時事 頃來世人の耳目を動かし殊に商業社會を震撼する絶大なるものは學士志賀重昂著南洋時事の右に出づるはなしと云ふ之を繕き隠れは寔に其文の快暢なる其詩の豪宕なる、言文放漫の今世には稀に見る所にして能く幾多の睡眠者と醒覺するに足るものならん今試みに迂夫として其要點と評せしめ南洋時事全篇は「オーストロン・シヤ」の「一なる」クサイ島の紀事に始め南方に及て「オーストラリア」「ニージーランド」と論じ更に北

長 頭 迂 夫

に轉して「クサイ」を記し尙北上して「ネーデルラント」州なる布哇の事に終る蓋し著者巡航の先後に因らるん其第一「クサイ」島紀事の如きは尋常地誌の少く精微なるに過ぎざれども他日幸に我國と濠洲との通商開くるに至らば此地誌も亦簡底と出づるの期あるべし

其第二「クサイ」島土人の減少を題して優勝劣敗の談に説き起し同島の人口急に減殺するの状を叙し其原因を窮めんが爲に諸般の實例を採り來り是れ其外國船より病原を舶齎して疫疾漫延するに由るか或は「精神力」の競争に職つくならんと言へり然れども著者ハ此二原因と同島人口の減少に歸する所以を暗示せざるを以て未だ適に措信すべからざるものあり殊に精神力の競争と云ふが如きは「此の「クサイ」島たる外人との交通も甚だ繁からず且外國人の此地に住居するもの比擬に一二宣教師の在るに過ぎず云々」の言あるのみにして却て之を反駁するものに似たり余は未だ之を以て天折と速くへまの心力を勞せしや否を察するに能はざるなり

著者は此種状態を觀て悚然として恐るゝもの如く黃、黒、銅色等の人種も遂に滅亡の期あらんと憂ひ吾人も亦性命を保護するの策を講せざるべからざる「このこと陳へ我國の支那と協同連盟し兼て英國と氣脈を通ずる」の良策たるを論せり嗟呼是れ何の言ぞや好し「クサイ」の蠻民は實に白人の爲に疫疾を傳へられて竟に剛絶すべしとすも豈此を以て直に我同胞を戒しむることを用んや夫れ疫疾の感不感は風土、年齢、體質、人種及其境遇に因ると以て甲人種の感染せざる痛も乙人種能く之を傳ふる事あるは醫家の所謂「イマブナシクランシー」に等しく固より怪むに足らざれども唯人種を異にするの故を以て「健全無病の者より病疫の原予と受くる」の理は決して之をあらす若し著者が所謂健全無病は既に疫疾の潛伏するものあるも僅に二三の患者に過ぎざるの意なりとせば亦以て背理の言たるを免かるべし雖も是れ劣者特有の眞性にあらすして優等人種も等しく賦くる所の性質なる痘瘡、梅毒の白人種に劇きと察す生物の變種に此例多きを觀て炳々ならん今一步を譲りて我儂黃人種は此點に於て白人種の劣る事とするも是れ唯交通の爲にして殺戮の爲にあらす獨立の爲にあらん然らば之を救済するの策は救済の論にあらすして品質の間にあらすや隣保結託に在らすして箇々衛生に在らすや蒲柳の質を變して銅身鐵骨とな

す俸在らすや余は實に彼の肥大なれども柔弱なる年長なれども硬頭なる黃人種の國を協同すの利を發見するに苦心のみならず借如利あるを知るも其實行を疑ふものなり我同胞人種の保護を計りて「英國と氣脈を通ずる」といふが如きは又何言ふに足らん

其第三には南洋諸島の所屬を異にするものと列舉して歐米諸國就中獨乙か此地の拓地植民に汲々たるを説き其利も亦鮮かと言ふを述べて此際我國人の宜く自ら警戒を加ふべきの旨を述べ叙説整然明かに各國の所屬を列挙し紛糾不解に關する地の如き余輩が耳に始めて耳にするものも或く網羅して洩す處なきに似たり是れ或は時事論一篇の楔子なるべし

其第四には濠太利が「南方の好鄰國」たることを證せんが爲め其存時の形勢を説き次に十年以來人口の増殖、農粟の繁盛貿易輸出入の巨額と表示し交通往來の媒介たる鐵道電線の敷延と之に伴生せる公費負擔の重きことを證し又其負擔此に止まれるは公有土地拂下の多きに由ると掲げて其進歩發達の迅速なるを積證し更に近年「スウダ」の遠征に濠洲より「義勇兵」を派遣したるは則ち其昌盛を徵するに足れり」とて壯快なる軍歌と援き來りて一段と結へり且曰く今と十年前の後濠洲庶富の狀を豫想し又彼我の間に貿易風の利用あるを以て觀れば是れ天我に惡む所の大都市好隣國なるを知るが故に世人は宜く此地の時事に注目すべし其五には「巴拿馬運河と南洋經濟との關係」と題し運河開鑿は即ち歐洲南洋間の航路里程五分一許を短縮するものなれば今後船舶の兩地の間往來するもの轉々頻繁なるべきを以て若し濠洲、新西蘭を我國の市場となさば巴拿馬の開通は便ち我に關係あると并に歐米と我國との直航にも捷路なることを論せり（余は此章に就きて評論せず）其六は殖産興業と與ふ物産販賣の市場を求めざるべからざることを説き起して濠洲新西蘭の好市場なること及び其隆昌の狀と航路の容易なることより彼我互に好貿易品あるを論し又乃者彼洲「メルボーン」府には羊毛輸出及日本地内製織場建設の議あるを聞けりと言へり其七には此等の國（南半球）と我國（北半球）と氣候の轉倒することを察説して貿易家の考査に供し又之を利用して冬季用夏季用物品製造者の換業ならしむることを得べしと論し次に濠洲の人口は現今三百萬に過ぎざれども其一

人の購買力は我邦人の五十に該ると以て貿易の上より言へば一億五千萬に均しきのみならず今後倍々繁栄を致すの兆あり云々彼我通商の利益は著者十と以て算ふれども之と總約すれば(一)貿易風の利用(二)濠洲は新開國にして人心豪放なる(三)氣候の轉倒(四)羊毛の廉價(五)將來頗る繁昌すべきことの五項を外にしては通常貿易の利益異なる所なし其八には濠洲移住の「アングロサクソン」民族早晩聯合して獨立するの目あらんとを夢に托して公言し其九には舊國の人口益増殖して衣食住不足を來し此が爲に遂に過亂を醸すか故に勢之を人烟稀疎の地に移らしめざるへからざるの理を論じ濠洲四十八萬方里人口三百萬の土は能く億萬の蒼生を容るべき空際あるものなれば將來之が熱鬧繁華を極むるに至るは期して峻つへし云々

故に枝葉を去て其大旨を約すれば第四より第九に至るまでは濠洲現今の繁昌と將來の隆盛を揆り之を交通貿易するの巨利あると説くに過ぎず蓋し時事論の骨子は此般の章句に在て存するならん余が友某曾て久しく濠洲に遊び親く其事物を視察し選りて余に語るに彼地耕牧の利を以てし其商業を問へば則ち微々振はす特に我貨物を售るの望なしと對へき而して指を屈むれば是れ實に今より四歳を溯るに過ぎず當時其田野の荒蕪なる、寒暖の中庸なる、土壤の膏腴なる、地價の低廉なるを聞き心竊かに其説に左祖せしか今將た此新研を讀むに及んで農業多利の濠洲が僅々四五歳の間舊態を一變して俄に我が好市場となせるに愕然たらずんばあらず否其果して然るや否と疑はざるを得ざるなり借如箇々の購買方は彼我れに五十倍するも特に五つの利益ありとするも我より輸出すべき貨物は彼の常用品少くして奢侈品多きに居るとを以て觀れば其求むる所は亦唯我産物海の一涓滴に過ぎざらん焉此を以て直に我好花主なり大市場なりと揚言するを得んや然れども余が此言を爲す遠く十年の後を察して論するにあらず只今は先づ之を恃ますして試に其嗜好すべき些少の貨物を輸出すると可とするものなり若し幸に著者の望む如く彼我の貿易此に端緒を啓きて益旺盛に至り又其十年の後の理想も果して其實に中るとあらば何爲れう此快筆を功なしと言とんや

其第十一、第十二の三章は濠洲の事と與に新西蘭の狀態と論じ尾するに痛快の濠洲論を以てせり首り新西蘭

の地理を略叙して同島の地形地勢我日本に酷肖するると説き(一)地質學的構成、氣候「等相同き」と以て「土壤の生産力、生物の發育力等大差なかるへし」と謂ふも雖も論據淺くして遽に信を措き難し蓋し火成岩は其肥瘠を殊にするもの多く且我國の土は瀟面火成岩より由來せしにあらすして皆に其一分に過ぎず況や土地の生産力を評定するに岩石の性質を根基とするハ恰も全豹の一斑を異ならざるや之を如何に大差なしと斷するを得ん其(二)(三)地形(四)商業(日本は將來東洋商業の中心、蘭島は南洋商業の中心)(五)水産(日本は將來北洋水産漁獲の中心、蘭島は南洋漁獲の中心)の對比は明確斬新なるを覺ゆれども感むらくは少く紀事の詳密を缺くもの、如し其(一)人民現時の職業は農なれども將來は二國共に貿易製造の國なるへしといふは余其何の意たるを解せざるなり夫れ一國の生業は其風土、人民の多寡、賦賦、文野、國の形勢等諸般の事情に由て同しからざるは勿論なれども何れの洲にか純一の業を以て國を立つるものあらんや所謂農國と雖其餘地の拓くべきを拓きて犁鋤を弄すべき荒蕪を見ざるに至らば勢他の業を求めて生活を計らざるへからず又商工の國と雖「土と荒蕪に附して他人の手に委し恬として漁機を轉はし帳簿に對するものあらんや即ち世人が農工商等の一二字を以て某々の國に冠するものは他の業を缺如するの謂にあらすして比較上某の業が發達せるを以て名づくるものにして其他の諸業も皆其極度に至るまで共に進んで止まざるなり然るに耕牧の業は土地の廣狹に由て制せらるるも雖他の二業は地積の制限少きを以て何れの邦國と雖(其疆域の廣狹を問はず)始めは内に土壤の利を收むべきも民庶漸く繁多を加へ自國の財源に乏らざるに至らば其餘剩は外に他國の土地を求め他國の産物を待たざるを得ず然らば今後幾星霜を經は各國其人口の滋殖と交通往來の便利等を致すの先後に隨ひ早晩製造貿易を營まざるものなきに至らん嗚呼此の如きを稱して「將來商工の國」と云ふ其れ可ならんや若し將た著者の言として農を捨て唯製造貿易を事とするの意なりとせば是れ國情に反し國勢に合はざるの論にして三業雁行の大旨に悖る余は愈其不可なるを見るなり

其(七)には新西蘭土人の狀態、都府港灣の我國と對稱するものあると及地形上一二の差異を掲げ此等の符合あるを以て世人は我を東洋の英國と稱し彼を南洋の英國と呼ぶ其稱呼は相等しけれども鐵路の長短は彼適に我に超は

輸出入分頭額は彼の一人能く我の六十七人に當ると思ひ又他日内地雜居行はるれば邦人皆外人の爲に壓倒せられんと憶ふて痛哀悲憤の辭紙面に躍出せり而して之を防ぐの策は我地地形地勢に適せる産業を撰むにありて日本の商工國たるを論し之を勸奨する方法を詳述し結局我國の支那と東洋貿易の買權と争ひて勝と制するの最必要なるを主張するもの如し其所謂「貿易製造の國」に就きては余之と上に評せしゆに今復此に贅するを止め是れ其意商工の業を盛にすへしといふに在りさせは誠に時事に割切なるを覺ゆ且其策を轉して外に馳するの處則活にして些の維維なきは讀者の感慨として更に深からしむるの價あらん惟其言ひ易くして甚だ成就し難きを懼るのみ若し夫れ商工の學校を新設擴張し勸業吏員として營業の心を發はしむる等の説は余が全然棄絶する所にして輿論の歸向も亦大た之と違ふとなかるべかり

想ふに著者は經綸の才に加ふるに風流韻事の念に富むもの、如く全篇所々に詩賦と散點し余が如き侑夫すら尙沙漠の羈旅に「オーシス」に翹ひ渺茫の航路に港灣に歇るの思あらしむ遮莫れ其作は概れ風月の吟詠にあらずして慷慨の切情を吐くにあらざるものなく卷首の一篇の如き人或は著者を以て所産の士とみなすも雖余は之を目するに唯歐洲の文筆を映する莖花とみなさんのみ亦以て著者心事の尋常ならざるを察すへきかな就中第十一は「ゴールドスマスの荒村感懐を讀みて感ありき」題し此詩家の履歴を略叙し著者が新西蘭に遊ぶの當時刺鷹爪の花亂開するを親氏の作中「刺鷹爪花徒に燦爛たり」とて愛蘭一村の慘状を表せし花も今は樂土の物に化したると思ひ時勢變遷の絶大なるを嘆し英人始めて此に殖民して爾來僅に四十五年と經ざるに此の如き森々の状と致すもの固より偶然ならざるを説き之を顧みて我北海道の現状に比較すれば轉た斷腸に堪えざることを痛論し北海道の小志より産業不振の状に及び之を救済するの策(一)農業の規模を擴張して厚く移住民を保護し、資本金として大農業を起さしめ又北海道に限り速に外國人の移住を容し(二)農産物の販路を擴張して内地、西比利亞東南岸の港市、布哇其他の外國に新市場を索め(三)主要の農産物と牧馬、麻、小麥の三に定め(因に對州の生業と換ゆへきと論す)(四)勸業吏員として營主業職と慎抱せしめ(五)一手賣買の會社を設置する(附けて水産物凍氷輸送の利を説く)に在るとは概

々せり始めは宛も詩仙の長賦を讀むか如く終は猶經濟學士の富國策を講するに似たり意匠婉曲立論正確一毒大の臭氣なし眞に全篇中の射鵰手となすに足れり願ふに此般の文法は著者特得の妙處、北海道は著者が寒雪積雪の地にして殊に其殖産起業の論は蓋し久しく實踐考較する所ならん其文の絶唱と稱すべく其論の著實行ひ易きも亦宜なるかな

南洋時事論は愛國の精神を以て充填し溢れて慷慨の海となすもの亦頗る多し是れ其目擊耳敲する事物は一として其が愛憤の資料たらざるはなきに由るならん余特に之を其第十二なる「新西蘭の會長」ウヰタコ「氏の談話」に見る此章にハ新西蘭の滅亡して今日に至りたるは英國と相戦ふて常に敗れ漸く國土を侵食せられたるに由るとを述へ日本も亦轉覆の虞に備へざるべからずと言ふもの、如し嗟呼何ろ其言の不吉不祥なるや苟も此文意をして國土變の戰滅を以て直に我國を推すものさせは余は唯之を杞人の憂として齒牙に掛くるとなかるべし然れも若し之として現時我社會の世態風俗を變革しつゝある彼の舞踏會や女男交際や國語の改革や其能所習改其とする新事物を以て深く憂ふるもさせは余は將に謂はんんす「殖産興業」が此好新狂を治むるに足らざるは猶葛根湯の痼疾に於けるごと一般絶えて寸効なきのみならず適以て其症を助長するとなしさせす宜く其勢強りて症候一變するの機を視ひ毅然たる國手を俟て反正の劑を投すべしと但著者の憂憤は此に在らずして別に淵源ありと言は、余復何と言はんや

第十三は「フアイシュー」島の傳道師と暗語するの條にして其三十年來己の職に熱心なりしを共に其教化の功偉なるを嘆稱するの語に過ぎず第十四、十五は「サモア」群島(一名「ナツゲート」島)の紀事にして前者は「サモア」國神を夢みて其謠言を受くるの顛末を記す其要、近年歐洲各國政府相競ひて南洋諸島の兼併呑噬を力め遂に獨乙は明治十八年十二月に「サモア」を略取せんさせしとより同島の地理、王統、叛賊等の事に及び又獨乙領亦も侵略の企計を運らして國旗を此地に植てたれとも英米二國其間に居りて事一たび解縁に歸せり然れども國王は獨人か叛將を教唆して再び干戈を動かさんことを恐れ北米合衆國政府の保護を仰ぐべきに決し又叛賊を以て國王と見做さ

るは獨英米三國領事の均しく認諾する所なる旨と約し三國領事は王と「サモア」兩黨との約條に對して保證人たる
とを公署し遂に獨人は其國旗を撤去せりと雖獨人侵略の志は未だ衰へず又叛將の禍心と包むと依然たれば其獨立
の到底保難すへからざるを論せり卷尾に附せる補言は即ち其先見を徵するに足るものなり但神靈已れ宗廟の
覆滅と悲むの餘り我日本も亦其轍を蹈む勿れとて最ごさへ杞憂に富める此旅客(著者)と戒めたる如きは恐嚇の術
揣摩の説と謂はざるを得ず神靈知らずや我同胞は皆こすく立ち廻るの才子今將誰か刃鋸るの愚と學ぶものあらん
何そ其言の無情無禮なる述莫れ彼れ若し千里眼順風耳を以て我が弱點を識破し浸漸の害は急忽の患と相伯仲する
と辨知して此等の言を爲すものならば願くは天機を洩して余輩の意見と違ふや否と所かん

第十五は「サモア」國王の粗野、暗昧、遊惰の状と記し民風の柔情怪むに足らざるを説く寫し得て妙なりと謂つへし
第十六十七(終末)は遠く南洋を去りて布哇國の事と論す其略に曰く布哇は近時我同胞二千人の移住する地にして
且彼我の間に汽船航路を開くの計畫あるを以て其動靜は大に我に關する所あり蓋し親近同國の精業益盛なる者は
米國と交互貿易條約と締結したるに由り布哇の砂糖は昔日に比して估價の低廉を致せる故に需要額に多きを加へ
たるに由るなれども頃者米國は此條約の不利を曉りて之を廢止せんと欲するの說あり若し果して廢止せらるるに
於ては管に糖業家の損失なるのみならず同國の存亡興敗も或は之に繫るとあらん又布哇賣國の風説并に其政體、
國會、製糖場等の有力者は悉く外國人と以て占めたる事等と以て觀れば其國は恰も蟬空に似て獨立の名あれども
實なきが如し予豈豈猛省せざるへけんや云々次に同國政府の歳出入金額と表して歳出の超過甚きと并に土人愈減
少外人愈増多の統計と掲げ此に基づきて推算すれば無慮五十年の後は復土人の子道なきに至るべきと究む次に彼
我交互貿易條約と結ぶへしとの善説と排斥して其餘鬱我大島、沖繩等の糖業と壓倒し目下漸く發達せんとする事
業と滅却するのし害あるべき論せり布哇の慘狀は余が嘗て數々聞く所にて早晚(著者)が五十年を謂ふは固より
數理上の推算に過ぎず(其土人絶絶の期あらんことは著者と同しく深く憐む所なれども余が見て以てすれば彼我
貿易條約と結ぶの不可と稱ふるは却て是れ僻説たるを免れず管に痴情と去て考一考せよ若し我土にして甘蔗の裁

植に適するも彼と徑庭なからしめは則ち可なり苟も彼の我に優るを知らぬ(余の理論上然りと信するものなり)強
て其輸入を禁遏するもとせずして此を彼に譲り更に我天賦の土質に適するものと撰んで叙次之に換ゆれば此輩成
な運に其業を失ふの虞なし即ち上帝化育の旨に於て何の不可あらんや然れども糖業は我政府の風に勸奨する所
にして既往の年月は之が適否を經驗するに餘ありしならん知らず果して其産額海外の適地と匹敵するや否

第十七は「布哇在留日本移住民」の現狀に就きて譯者布哇總領事か我外務大臣に具狀したる報告書を摘載し此移住
の爲に(一)日本人民下等社會は其職業に就くと得へく(二)日本下等社會に規律的の勞働法を開引し(三)日本の資
本を増殖し(四)日本下等人民に冒險進取の氣象を涵養し兼て其知識を倍する等四項の利益あるを説き且曰ふ予
(著者)が移住を懲進するは特り布哇にのみならずして海外到る處に我同胞の優適せるを見んざ欲するものなり但
之を奨導するは殖民兼併の爲にあらずして其主意唯商業的新日本を創造するに在り云々願ふに布哇移住日本人
民待遇の事は一たび新聞紙の一回題となすに至りたれども我總領事の報告書出づるに及んで世人の惑を解きしか
此一章ハ更に此を探確するの價あるものならん其移住より生ずる所謂四利の中第二第四の如きは我同胞の大缺點
にして若し能く此等の慣習氣象を養生し衆庶之と完得するに至らば致富の上に偉大の功あると争ふ可らず故に社
會の上下を論せず正業の異同を問はず(必しも「商業社會」に限らず)異境に遷りて此般の好氣風を修得し來るは
自儘の誠に所望に堪へざる所なり雖先づ之として其事の愉快にして贏利あるを領せしむるにあらずれば人情誰
か蓋に苦に趨くものあらんや好む之を領せしむるも因襲の久しき人皆本土に固着して恰も萬籟の灌木と共に枯る
るを知らざる如く華胥の國我外に在ると願ふざるもの如し矧や中流以下の社會は皆て他邦の語を學ばず一部の
萬國地誌すら手に觸れざるもの多きに居る故に之を懲進するの方極めて難きのみならず貧乏施すの計なき徒にあ
らざるよりは幾さ皆雙者の如く然り(中流以上の社會にして現に外國移住のものあれども之を其全體に比すれば
唯櫻林の一樹に過ぎず固より余輩の冀望を滿たすに足らざるなり)余は教育に賴り汎く此等の氣象を涵養するを
以て最實効を敢り得へしとする者なれども著者が毎に「言ふへくして行ふべき説」を述ふるを主眼としながら獨

此章に於て其希望を達すへき方策を擧げざるを慥むのみ
 今年と聞くに確み余は著者此國親米食の世に際し東輪北米を推して通商移住の要地となすの時機に方り幾千里
 の海濱を渉りて從來世人が等閑に附し去れる州國を採り大聲疾呼して之が注意を促かしたる勇氣を稱すると與に
 通商寧ろ其主とする處に粗にして之が題外なる我國時勢の論に精きを公告せざるへからず又其結論には海外通商
 と勸奨せんと欲するの熱情より旨儘々々大に屬するものあると公告せざるへからず是れ蓋し著者が官船へ投し
 て自在に探究するを得ざりしにも由るへしと雖或は其意唯南洋の時事を藉りて我同胞を警戒するに在るやも亦未
 だ知るへからざるなり且通商誠意賊心と以て我國目下の急務を脱くの處、克く懦夫と起たしめ悲歌の士と鼓舞し
 又克く世間趨炎附勢の徒を蓋殺せしむるに足るものならん若し夫れ文字の氣勢光疎ある圓轉靈活なる固より贅
 を須ひずして可なり然らば余が此者を目して爲政家并に商家の必讀を謂ふも誰が之と疑ひたりと言はん

◎シヤツハンと新聞批評

“The Japan Mail.”

As the result of a recent visit to Australia and several other islands in the Pacific,
 Mr. S. Shiga has published a very interesting and suggestive book of about 200
 pages, under the title *Nanyō Jiji* (Affairs in the Southern Seas). The work is some

欠

MISSING

emigration, he recommends his fellow-countrymen to establish commercial colonies
all over the world.



肆書捌賣

熊本新二丁目	金澤片町	同 本町三丁目	名古屋京町一丁目	同 南久寶寺町四丁目	同 北久太郎町四丁目	同 備後町四丁目	大坂北久寶寺町四丁目	京都河原町通二條下	同 銀座四丁目	同 新橋竹川町	東京神田表神保町
長崎	益智	川瀨	村松	前川	柳原	梅原	丸屋	大黒	博聞	共益	中西
次	代	五	善兵	喜兵	龜書	書	書	支	支	支	支
郎	館	助	郎	衛	衛	七	店	店	社	店	太

肆書捌賣

富山東四十物町	松江天神町	岡山上之町	廣島横町	同 堺町	高知種崎町	鹿兒島六日町通り中町	久留米米屋町	柳川瀨高町	佐賀白山町	同 酒屋町	長崎引地町
中田	川岡	細村	松村	山中	澤本	吉田	菊竹	宮本	河内	安中	鶴野
書	清	謹	善	專	駒	幸兵	儀	宗四	壯	半三	常
店	助	舍	助	助	吉	衛	平	郎	介	郎	造

肆書捌賣

新洞古町通六番町

津大門町

飯田池田町

静岡江川町

濱松紺屋町

仙臺國分町

山形七日町

函館末廣町

神戸相生橋

松山湊町

青森米町

横濱辨天通

櫻井産作

河島九右衛門

奥村收藏

廣瀬市藏

谷島屋源三郎

高藤書店

五十嵐太右衛門

魁文社

熊谷久榮堂

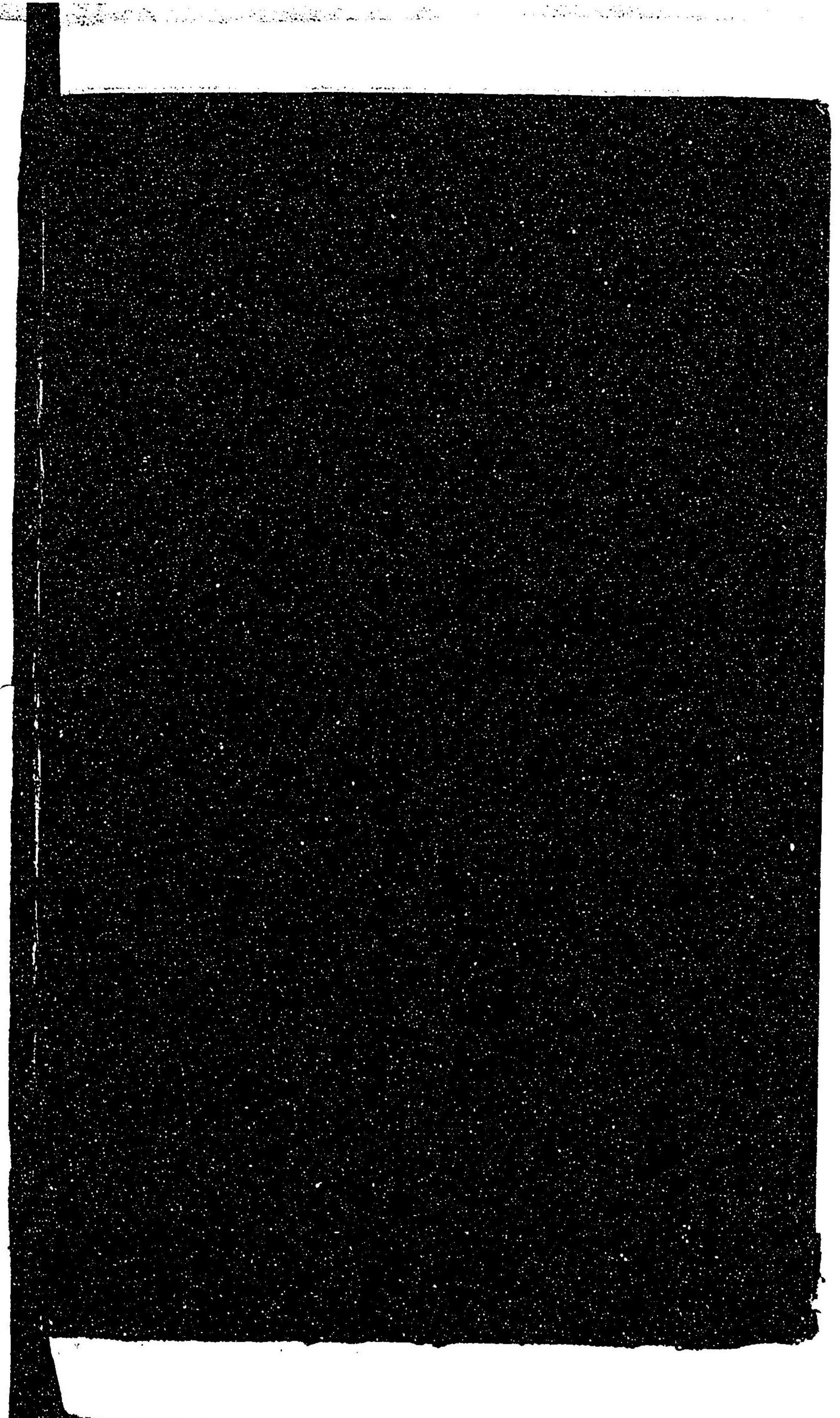
土肥與兵衛

成田泰

丸屋書店

33

207



33

207

(M)

026781-000-0

33-207

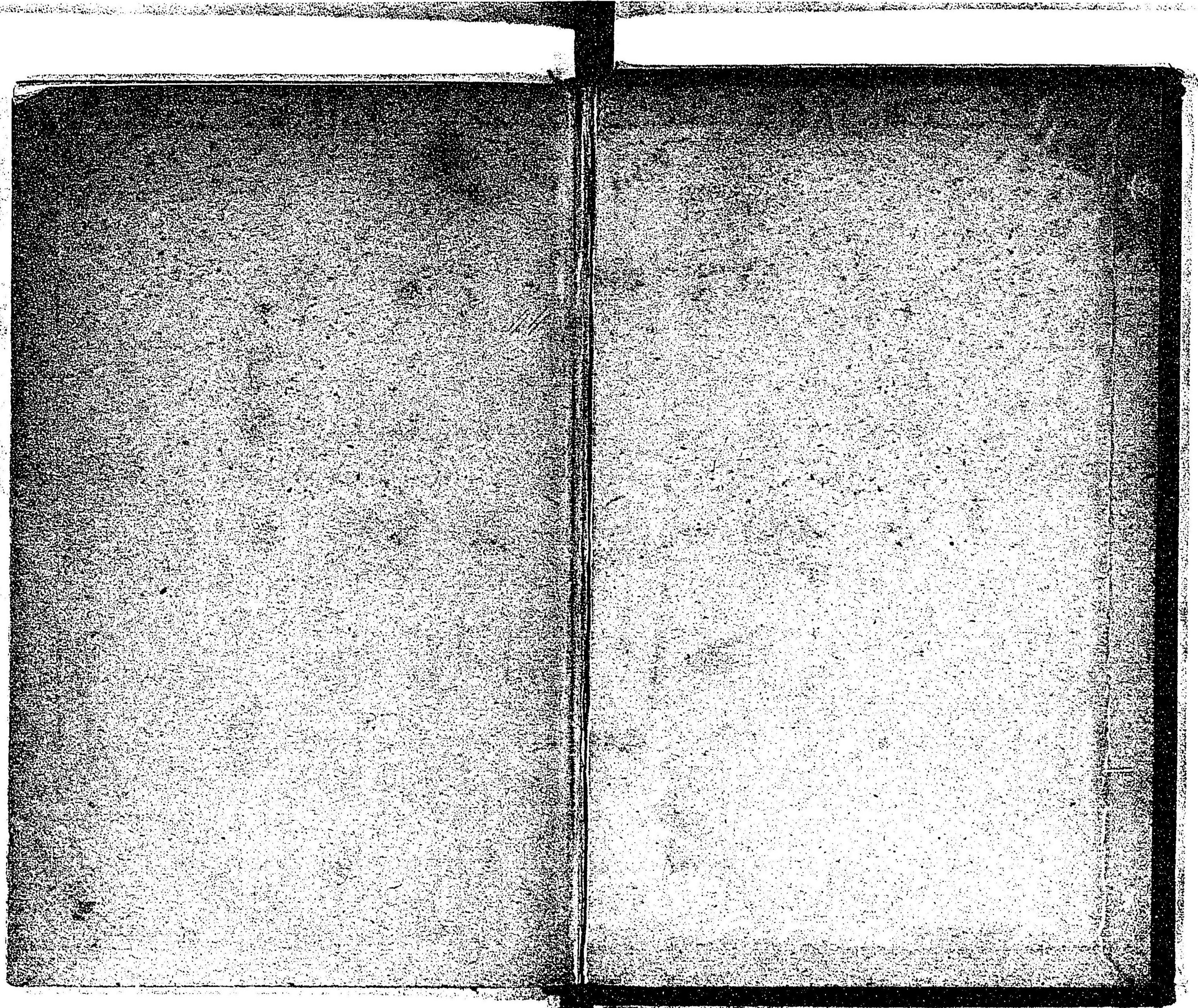
南洋時事

志賀 重昂 / 著

M22

ADD-0482





4